
なのはと普通の男

葦束良日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのはと普通の男

【Nコード】

N8571T

【作者名】

葦束良日

【あらすじ】

リリカルなのはにオリ主を加えた、よくあるお話。とりあえず、オリ主はなのはと恋人です。しかしそれはStS時代の話。そこに至るまでを描いていこうと思います。皆さんのお暇を埋める手伝いになれば幸いです。※この小説はArcadiaにも投稿しています。

最初 出会い、そして未来

甲高い歓声が少女の耳に届き、ふとそちらに顔を向けた。

視界に入ってきたのは、自分と同年代の男の子たち。その足元には少し汚れたボールが休む間もなく行き交っており、彼らがサッカーを楽しんでいるのが一目でわかる。

ポンポンと忙しく動くボールにしばし目を留めていた彼女は、次第にその視線を上げていく。

すると、ボールを追い掛け回す少年達の顔を捉えることが出来た。その表情はそれぞれ、悔しげだったり、驚きのものであったり、また嬉しげなものであった。

ボールがそれぞれの足元に吸い込まれるたび、揺れ動くその表情。一秒一秒ころころと転がっていく彼らの表情は、しかし総じて楽しそうであるという点においては、そのどれもが一致していた。

——キィ。

少女は、ブランコを少し揺らしながら、その光景を見ている。

古びた金属が擦れる音は、少女の耳にこそ大きく響くが、しかし離れた彼らに届くことはない。

当たり前だ。少女と彼らの間には距離があるし、そして何より彼

らは自分達の遊びに夢中だった。知り合いでもなんでもない少女のことなど、気にしているはずもない。

まして、ブランコが微かに揺れた音など。そんな囁くよりも小さな音に、反応が返ってくるわけがないのだ。むしろ、そんな音に気づけというほうが無茶で、勝手というものだろう。

幼い少女にだって、そんなことはわかっていた。しかし、それでも。少女の心は、少しでも痛みを感じていた。

その時、不意に公園の外から声が聞こえてくる。若い女性の声だ。少女にもわかった。その声は彼らの誰かを呼ぶ声だ。となると、その女性は彼らのうち誰かの母か。呼びかけているそれが、少年の名前なのだろう。

その声を聞いた少年が一人、ボールからぱっと目を離してその女性の下へと走っていく。明るい顔で、身振り手振り活発に自分の活躍を伝えているようだった。

女性はそれに笑って相槌を打ち、やがてその子の手を引いて公園から去っていった。

少年が一人いなくなると、今度は別の少年の母がやってくる。次にまた別の子の母が。その次は父が。彼らをそれぞれ迎えに来た。

誰もが笑いあって、公園を後にする。そして、気がつけばその公園に残っているのは、少女一人だけだった。

——キィ。

ブランコが揺れる。金属が擦れる音。

少女は、一瞬それがブランコのものだと気づかなかった。自分の胸の辺りで、その音が痛みを伴って響いたからだだった。

すっ、と少女は顔を伏せる。

揺らぐ視界は、既に慣れ親しんだものだ。少女にとって見慣れた世界。どこもかしこもぼやけていて、一つとして鮮明に映るものはない。

少女にとっての世界は、いつだってそんなものだった。家族はいつも傍におらず、家には自分ひとりだけ。どんな顔で笑っていたのか、どんな表情で暮らしていたのか、どんな感情を向けられていたのか。全てが曖昧にぼやけた世界。

少女の目に映るのは、そんなよくわからないものだけだった。

しかし、彼女は何も最初からそうだったわけではない。少女には、家族と共に笑い合う思い出があった。そんな何物にも変えがたい時間があったことを、少女ははっきり覚えていた。

それが、いつからか徐々に崩れていったのも、覚えている。父がいつの間にか家にいなくなり、母も仕事で家を空け、兄と姉もそのお手伝いにと離れていった。

そして、いつしか少女は独りになったのだ。

あるいは、少女にとって最も不幸だったことは、かつての幸せな記憶を覚えていることだったのかもしれない。幸せな過去と、独り

ぼっちの今。お互いをきちんと認識し、比較できてしまうという、それこそが少女の今を形作っているのかもしれない。

じわりと滲む世界の中で、少女はさっき見た光景を思い出す。

手を繋ぎ、笑いあう親子。楽しげに公園から去っていくその姿。

きっと、あれは自分が心の底から欲しがっているものだ。けれど、自分には与えられていないものだった。

再び、胸で金属が擦れる音。少女にとって聞き慣れた音。しかし、それに纏わりつく痛みだけはいつまでたっても慣れない、そんな音。

その痛みにも更に視界を揺らがせながら、少女は声に出さず、そっ
と自分の気持ちを呟いた。

(さびしい)

心の中で呟くと、また少しだけ痛んだ。

それは、声に出してはいけない、本当の声だった。離れていった
家族に聞かせてはいけない、少女の本音だった。

(さびしい)

父は、今は傍にいられないらしい。母は、いつも忙しそうで笑顔

がない。兄はどこか近寄りがたく、姉は母と兄についていくだけで精一杯。

ゆえに少女は独りぼっち。しかし、賢い少女は、彼らに悪気がないことをわかっていた。

決して自分が嫌いになったわけでも、わざと遠ざけようとしているわけでもない、少女は知っていた。

むしろ、自分と一緒にいる時間をどうにか作ろうとしているのだと、賢い少女は知っていたのだ。

(さびしい)

だから、少女は悟った。

その気遣いを見事に無駄にはしていない。我が儘を言って、邪魔をしてはいけないのだと。

自分と一緒にいるために、誰もが一生懸命頑張っているのだ。それを知っているのに、どうして「もっと構って」と言えるだろう。少しでも早く帰ろうと必死になっている姿を見たというのに、どうして「そんなことより、一緒にいて」と言えるだろう。

少なくとも、少女には無理だった。

だから、彼女は口を閉ざした。そして、今を耐えることにしたのだ。

本音を隠し、作り物の笑顔を見せ、我が儘を言わず、良い子になる。

母が、兄が、姉が言う“いつか家族一緒にいられる未来”。

家族みんなが願う未来のために、幼い少女に協力できることは、それしかなかったのである。

——しかし、いくら賢くても彼女はまだ子供だった。

家族の居場所である、自分の家。そこから離れた時、少女はいつも一人で涙を流していた。

頭ではわかっていても、心が納得していない。仕事は大事で未来に必要なこと、それはわかる。けど、それ以上に自分を優先して欲しかった。

自分の感情全てに嘘をつくには、少女はまだ幼すぎたのだ。

(さび、しいよお……)

独りは、嫌だ。

寂しい。

ブランコに腰掛けて、少女は肩を震わせた。

滲んだ視界に映る地面に、水滴が落ちて染みが出る。砂地に溶けていく涙は次第に数を増やし、その分だけ少女の心は軋みを上げていた。

こうして公園で少しだけ自分に素直になるのは、少女の日課だった。どうしても耐えられないと感じた時、彼女はいつもこうして一人で泣いた。誰もいない公園でなら、誰にも迷惑をかけない。誰の邪魔にもならないと、そう考えたからだ。

それに、一度涙を流せば、少しだけ心が楽になるのだと少女は知っていた。それは彼女の経験から来る知識であり、また彼女が知る唯一の心を救う方法だった。

だから、今日も彼女は一人で泣く。家に帰ったら、また笑えるように。家族に心配をかけることがないように。彼女は、誰も見ていないところで、泣くのだった。

しかし、この日に限って、少女が泣く公園に足を踏み入れた男がいた。

そして、その男の行動が少女の涙を止めることになる。

ブランコに乗って、俯いて涙を流している少女。その姿を見つけた男は、彼女の傍にそっと近寄り、声をかけたのだ。

「……えーっと、まず俺は怪しい者ではない」

突然、近くで自分以外の声を聞いた少女は、びっくりして顔を上げる。

滲む視界の中、飛び込んできたのは黒一色の格好をした年上の男性だった。その格好が俗に学ランと呼ばれていることを、少女は知らない。

「そして、あー……その、俺はロリコンではない」

いきなり自分には理解できないことを言う男を、少女は不思議そうに見上げた。

ひょっとして、泣いていたことが迷惑だったのかな。ふとそんなことが少女の脳裏によぎり、じわりと新たに涙が眦に浮かぶ。

誰の邪魔にもならないように、迷惑をかけない良い子でいよう。その思いの下、一人で泣いていた少女にとって、誰かに迷惑をかけることは絶対にやってはいけないことだった。

それを、やってしまったのではないか。良い子ではない自分は、家族のお荷物でしかないのに。

そう本気で信じている少女は、目の前の男に迷惑をかけたという

事実に深い後悔と悲しみを抱いた。少女の涙は、そのためだった。

顔を上げたことで、浮かんだ涙は地面に落ちずに頬を伝う。

それを見た彼は、慌てたように制服のポケットに手を突っ込んだ。そして、ハンカチを取り出すと少女の前にしゃがみこんで、強引に、しかし優しくその涙を拭いていく。

「な、泣くなよ。何があったのかは、知らないけど。けど、泣くよりは笑ったほうがいい、絶対」

涙を拭われた少女は、いきなりの行動とその物言いに、目をぱちくりさせて何も言わない。

驚きゆえに思考が止まっているのは傍目にも明らかだったが、男は内心でちよつとびくついていた。勝手なこと言って、怒ってるのかも、と。実際には、男のそれは杞憂でしかない。

とはいえそれが男にわかるはずもなく。少女が何も言わない間に、ひとしきり涙を拭った男は、ハンカチをしまい、こほんと咳払いをした。

それを受けて、少女の目と男の目が近い距離で交わる。

「えーっと……、隣いい？」

「え？」

男の突然の言葉に少女は疑問を返すが、答えを聞く前に男は隣のブランコに腰掛けていた。

そしてそのまま、男はブランコを軽くこぎ始めた。

金属が擦れる音が、少しだけ速く辺りに響いた。

「懐かしいなあ。昔は、こうやってブランコで遊んだもんだ」

男は、小さく笑った。

それはブランコで遊ぶという行為を、懐かしさと共に本当に楽しんでいるようだった。

「……………」

少女も、少しだけこいでみる。

キツ、キツ。

等間隔で鳴る音は、それまでと違ってどこかリズムカルで音楽のようだった。隣で鳴る音は、少女のそれよりも速く賑やかである。少女には、並んで揺れるブランコが楽器のように音を合わせているようにも感じられた。

二人は、そうして暫くブランコをこいでいた。

男が隣でぽつぽつと自分のことや子供のころのことを話し、少女はたまにそれに耳を傾けながら、ゆっくりブランコをこぐ。

その境遇から人に対して臆病な部分を持つ少女は、積極的に男と話すことは出来なかった。そのことを彼女は気まづく思うが、ちらりと見たところ、男は気にしていないようだった。

ただ少女に笑いかけながら、ブランコをこいでいる。その男の姿に、少女はなんだか胸がほっと落ち着くのを感じた。

上手く良い子でいられていないのに、男はそのことに何も言わない。変わらず笑って話しかけてくる。

自分が泣いていても、言葉を返せなくても、大丈夫なんだ。

そのことが、何故だかひどく嬉しく感じられた。

「――よっと」

暫くして、男は掛け声と共にブランコから飛び降りた。

少女もそれに続いてブランコの揺れを止める。

隣にいた男は、さっきと同じようにブランコに腰掛けている少女の前に立ち、そっと手を差し出した。

「砂場でも行く？」

少女は、その手を恐る恐る握り、しかし強く頷いた。

「うんっ」

それは、少女が初めて自分から踏み出した一歩だった。

＊
＊

「――懐かしい夢……」

朝日が差し込む自室のベッドの上、半身だけを起こした状態で高町なのはは呟いた。

時刻はまだ早朝。日課であるトレーニングを行うにしてもいささか早い時間であった。

それでも、早起きは三文の徳という言葉がある。彼女の故郷で広く知られていることわざであり、また彼女自身もそれは正しいと思える言葉であった。

そのため、彼女は二度寝という誘惑の手を意識的に振り払い、隣で眠る親友を起こさないようにベッドを出た。

そして洗面所で顔を洗い歯を磨くと、部屋に戻って薄い桃色のパジャマを丁寧に脱いでいく。次いでトレーニングウェアではなく、既に何年も袖を通してすっかり慣れた制服に袖を通していく。たまには朝ゆつくり過ごすのもいいだろうと何となく思ったからだだった。

その着替えの最中、なのはの脳裏に浮かんでいたのはたった今まで見ていた夢であった。

あれは、まだ本当に幼い頃。魔法なんてものを知らず、それどころか小学校にも入っていない、そんな昔の思い出だった。

あの頃の自分は、本当に何もかもに対して心を閉ざしていたのはと思う。それは家族に対しても同じことで、どこか他人行儀に身構えていたことを今更ながら自覚していた。

もっと突き詰めて言えば、心の全てをさらけ出すことが出来なかった、と言うべきだろう。それは遠慮から来るものであり、同時に相手に嫌われたくないという恐怖から来るものであった。

他人に対しては当然のこと、家族の場合は相手が家族だからこそその思いは顕著であっただろう。当時のなののはにとって家族とは、“この人たちに嫌われたら終わり”という根源的な恐怖を抱かせる相手でもあったのだった。

無論、それはいま分析的に見ればそうだったということであり、当時のなののはにそんな自覚はなかった。また、現在のなののは、それは昔のことだと笑って話せるぐらいには家族として普通に生活できている。そこに遠慮や恐怖と言った感情はなく、いたって良好な家族関係である。

とはいえ、それは現在の話。当時の彼女にとって家族はそんな最後の寄る辺であり、決して嫌われるわけにはいかない存在だったのだ。その恐怖はやがて彼女の性格や嗜好を改変していき、世間的に見て“良い子”であることを自身に強いることになる。

その心の底に、誰にも本心を明かせない、誰も自分の近くにいて

くれない、というどうしようもない寂しさを抱えながら。

いま考えれば、なんて独りよがりだったのだろうかとなのは赤面する。その時は本当に心が引き裂かれそうなほどに辛く、どうしようもない日々だった。けれど、だからといって内に籠もればいいというものではない。

ただ手を伸ばせばよかった。そして、言えばよかったのだ。「寂しい」と。

きっと、それだけでなのはは救われた。母も、兄も、姉も、なのはのことを嫌っていたわけではなく、むしろ大好きだったのだ。ただ、生活のためにもその時は本当に余裕がなかっただけ。

だが、彼らにとって一番大事なものが家族であったことは間違いない。だから、なのはがそう言えば彼らは自分達の行動を反省し、なのはのために改善しようとしただろう。

しかし、なのははそうしなかった。頑張っている皆に我が儘を言っちゃいけないと思ったからだ。

——つまるところ、子供だったのだとなのはは思う。母や兄達にとって一番大切なものは何なのか、そんな簡単なことすら分かっていなかったのだから。ちょっと周囲に目を向ければ、分かったであろうことなのに。

ふう、と当時の自分にほんの少しの恥ずかしさを感じながら、なのはは溜め息をつく。

既に着替えは終わり、その身は白と青をベースにした教導隊の制服で包まれている。そして次に部屋に置かれた化粧台に向かい合い、簡単な化粧と髪型の乱れを直していく。最後に髪を左側に集め、ヘアゴムで留めれば準備完了。

化粧台の鏡を覗き込み、なのはは一つ頷いた。

「うん、大丈夫」

満足げな笑みを浮かべたなのはは、まだ眠っている親友に小声で行ってきます、と囁く。

それに反応したのか身じろぎをする姿に笑みをこぼし、なのははそっと自宅を後にした。

部屋を出たのはは、その足でクラナガンの市街地へと向かっていた。

まだ朝も早い時間であるが、既に営業を始めている店舗は意外と多い。それは二十四時間営業のスーパーやコンビニといった店であったり、あるいは商店街の個人店のように、新鮮な食材を獲れたてで出している店であったりと様々である。

とはいえ、それは一部の話。多くのお店はまだ営業時間前であるし、お客となるべき人の大半も布団の中にいる時間だ。昼間ならば闊達な賑わいを見せる市街も、今は閑散として僅かな人間が擦れ違っただけだった。

そんな中、なのはは行きつけのスーパーに入っていく。そして籠を持ち、いかにも慣れた様子で店内を回り始めた。

その過程で食材を手にとって見て、あるいは値段とにらめっこをしつつ、次々と籠の中に入れていく。

そして幾つ目かの食材を入れたところで、なのははレジのほうへと足を向けた。

会計を済ませ、すっかり顔なじみになってしまったレジのおばさんと談笑する。いつもならそんなに時間は無いが、今日は少し早い。だから、なのはは心持ちゆったりとした態度でおばさんとの会話を楽しむ。

「毎朝大変だね、なのはちゃんも」

「いえ、そんな。私が好きでやっていることですから」

善意の気遣いに、なのはは微笑んで答える。

事実、なのははこの行動を好きでしているだけで頼まれたわけではない。忙しいなら無理はするとも言われているが、しかしやりたいのだから仕方がない。

少なくとも、なのはは明確に止めろと言われるまで止めるつもりはなかった。

そんな気持ち透けて見えるなのはの答えに、おばさんは呆れとからかいの混じった声を出した。

「幸せモンだねえ、旦那も」

「だ、旦那って……」

ストレートに言われ、なのはの頬に僅かな朱が差した。

それを見て、おばさんは楽しそうに笑う。

「あはは。まあ、上手くやんなよ。今日はいつもより早いし、イロイロ出来るんじゃないかい？」

「お、おばさんっ！」

変にイロイロの部分強調して言ってきたその意味を理解し、なのは先程よりもはっきりと顔を赤くして声を荒げた。

そのあまりにわかりやすい反応に、おばさんは更に笑い声を上げる。それに対して、なのは身を縮こませて俯くしかなかった。

その後もいくつか世間話をして、なのははスーパーを後にする。

そして目的地に向かって歩き出した。

しかし、ついさっきレジのおばさんに妙なことを言われたからだろうか。若干いつもよりこれから会う相手のことを意識してしまっているような気がする。

それはまあ確かに自分もいい年だし、そういう欲求がないといったら嘘になる。けど、女の子からそういう風なことを求めるのは、照れくさいというか恥ずかしいというか。そりゃ嫌いではないけど、朝からなんて身体がもたないし……。で、でも、もし求められたら……。

と、そこまで考えたところで、突然なのははブンブンと風を切るかのように激しく頭を振る。振られた顔は見事な朱色だった。

朝っぱらから、しかもこんな往来で、自分はいったい何を脳裏に描いているのか。それもまるで自分からそうなることを望んでいるかのような妄想だった。

小学生の頃は、高校生で思春期真っ盛りな彼に「エッチなのは程ほどに！」と偉そうに言ったこともあるのはである。そんな自分が、なんだこれは。

はしたない、もっと慎みを持たなきゃ。そう思いつつも、一度想像してしまった映像はしぶとくなのはの頭に残り続ける。

うわー、うわー、と意味のない声を上げながら熱くなる頬を押さえる。穴があつたら入りたい。そんな気分を、なのはは今まさに体験していた。

なのはにとって幸いだったのは、早朝のために人が少なかったことだろう。自身の奇行を目撃する人間が殆どいなかったのだから。

ともあれ、なんとか気持ちを落ち着かせたなのは、暫く歩いた後、ようやく目的地であるマンションに辿り着いた。

まだ建てられてから五年も建っていないそこは、美しい外観を当時と変わらず保持している。シックなブラウンで統一された外壁に、どことなく高級感を感じさせる黒い石造りの門。その先に繋がるガラス張りの玄関口は、セキュリティも万全という高級マンションだ。

ちなみにこのマンション、所有者はギル・グレアムとなっている。なのはの目的でもある人物は、そのツテでここに住むことができていた。彼本来の収入は、実際のところなのはよりも下だったりするのだ。

なのはは門をくぐると、慣れた動作でセキュリティを解除、そのまま彼が住む部屋へと移動した。

エレベーターに乗り、上の階へ移動。その後は真っ直ぐに目的の部屋を目指して歩いていく。そうして辿り着いた彼の住処、その扉を前にしてなのは徐にポケットから合鍵を取り出すと、掛けられた鍵を外した。

ガチャンとロックが取り除かれた音を確認して、ゆっくりと扉を開いて部屋の中に足を踏み入れる。

そうして目に入ってきたのは、綺麗に整頓された玄関。艶を放つフローリングの廊下。そして廊下の両脇に幾つかあるドアと、突き当たりに見えるリビング。何の変哲もないマンションの一室。なのは自身、既に見慣れた光景がそこにあった。

その玄関に立ち、なのは心が安らぐのを感じていた。ほぼ毎日のように来る家。彼の住む場所。ここはなのはにとってもう一つの家とでも呼ぶべき場所だった。それゆえの安心感を、なのはは感じていた。

ほっと一息つき、なのははまずリビングに向かう。そこで買ってきた食材を冷蔵庫の中に、それぞれ種類わけをしたり使いやすいように工夫しながら収納していく。

そしてその作業が終わると、エプロンを身につけて朝食の用意を始める。彼女が起きた時間から既にだいぶ時間が過ぎ、それでもいつもよりは早い、少し早い朝食でも通じる時間となっているので、大丈夫だと判断したのだ。

なのはは今日の献立はどうしようか、と少しだけ迷い、やがて決断したのか冷蔵庫から必要となる食材を準備し始めた。

これが、なのはが好きでしていることだった。毎朝彼の家に赴き、朝食を用意する。誰に強制されたことでもない。彼女自身が望んで行っていることだった。そしてそれは、地球にいた頃から続く習慣でもあるのだった。

かつて、なのはは家族との問題が解消されると、やがて母である桃子に頼み込んで料理を習い始めた。それは、とてもお世話になり、またその時から好意を抱いていた相手に、喜んでもらいたいという思いからであった。

娘からの頼みごと、それも自分と一緒に台所に立ちたいという可愛らしいお願いに、桃子はむしろこちらから頼み込みたいというぐらしいの勢いで了承。その時から始まったなのはの料理修行はきちんと実を結び、そして彼に食べてもらうという願いは達成されたのだ。

それから、なのははことあるごとに彼の家に行き、料理を振舞うようになっていた。小学生を台所に立たせることに始めは難色を示していた彼も、毎日のように続くうちに現状を受け入れていく。無論、なのはが怪我などをしないように注意はしていたのだが。

それは結局なのはが中学生になっても続き、仕事でミッドチルダにいる時には、よほど忙しくない限りは毎朝わざわざ地球に帰るほどの徹底振りだった。

さすがにそんなことを繰り返しては身体が持たないということで、彼はよく強制的になのはを休ませたりと対策をとった。ご飯を作ってもらっている身ではあるが、自分の身体も大事にしてくれ、という心からの感謝と心配からくるものだった。

そうして、たびたび彼の家に泊まりこむようになったのは、果たしていいことだったのか悪いことだったのか。

非常に複雑そうな顔をしていた土郎や恭也にとっては後者、ひたすら嬉しそうにしていたなのはにとっては前者だったのは間違いないだろうが。

ともあれ、そういった習慣と自分の料理を食べてもらえる嬉しさから、なのはは今日もまた彼のために朝食を作っているのだった。

「——うん、これでよしっと」

調理を終え、盛り付けをしていたなのはは、自信たっぷりに頷いた。

狐色に焼けたトーストに、外はふっくら、中はトロツと半熟に仕上げたオムレツ。そこに焼いたウインナーソーセージと、レタスやトマトといった瑞々しい野菜が華を添える。

いつもは和食を中心に行っているが、たまにはいいだろうと思って今日は洋食で揃えることにしたのだ。どれも納得のいく仕上がりになって、料理人として満足げな笑みを浮かべるのはだった。

さて、料理が完成した以上、次に必要なのはこれを食べてくれる人だ。

というわけで、なのはは早速まだ夢の世界にいるだろう彼を起ここ

しに行くことにする。

リビングを出て、左側に二つ並ぶ部屋。その手前側が彼の寝室だ。ドアノブにそっと手を添えて、ゆっくりとドアを開いていく。

部屋の中はあまり飾り気のないシンプルなものだった。壁にかけられているのはカレンダーとコルクボード、あとはこれといった特徴はなく、ベッド、机、押入れ型のクローゼット、小さなテーブル、本棚が並ぶだけである。

ただ、その本棚が天井と床を繋ぐほどであり、その大きな空間にびっしり隙間なく本が並んでいる点は、この部屋唯一の特徴といえるかもしれない。とはいえ、それも彼の仕事上必要という面があるからだった。

そんな部屋を、なのはが静かに歩く。目的地は規則的に寝息が聞こえてくるベッドだ。やはり、予想通りまだ寝ているらしい。とはいえ、なのはが来る時間がいつもより早いのだから、それもやむなしといった感じではあった。

それほど広くない部屋の中、なのははすぐにベッド脇に辿り着く。そして上から息を潜めて彼の寝顔を見つめた。

もう十年以上、一緒に過ごしてきた顔がそこにあった。万人の目を引くほど整った顔ではない。けれど、なのはにとっては誰よりも格好よく思える魅力的な人だった。

それは、あの公園で出会った時からなのはの心の中にあり続ける気持ちだ。彼女にとって、彼はまさしくヒーローだったのだ。

誰にも負けない才能を持っているわけではない。魔法の力があるわけでもない。聖人もかくやというほど清廉なわけでもない。きっと、この人を表現するなら“普通の人”という言葉が最も当てはまると、誰もが言う。そんな人だ。

けれど、他の誰でもない。なのはに一步を踏み出させてくれたのは彼だった。寂しさを埋めてくれたのは、彼だったのだ。

最初は子供心に憧れただけだった。自分を救ってくれた彼に、それこそテレビに映るヒーローを見るかのように。そして、ただ無垢に慕っているだけで満足だった。

けれど、いつからかもっと、もっと、と欲が出てきたのだ。もっとよく知りたい。もっと話したい。もっと触れたい。もっと一緒にいたい。もっと、わたしを見てほしい。

その気持ちを母に相談した時、なのははその気持ちの正体を知った。これは恋なのだと。

助けてくれたヒーローに対する憧れではない、もっと明確で、現実的な気持ちなのだと、なのはは知った。

始まりがたとえ刷り込みのような憧れだったとしても、そこから育った気持ちは本物だった。寂しさから救ってくれたから好きになったのではない。それはきっかけに過ぎない。そうして知り合った彼を見て、好きだと思ったのだ。

そして、その気持ちは今も衰えることなく、むしろ強くなってなのはの内にあった。

それは思いが通じ合ってから、より顕著になっていった。

その瞬間は、この世にこんなに幸せなことがあるのかと、なのは本心からそう思ったものなのだ。

彼は現在二十九歳。なのはとの歳の差は十歳もある。そして、彼女が告白したのは、彼が二十五歳の時だ。当時既に社会人であった彼が、中学も卒業していない自分と付き合うということに、一体どれだけの葛藤があったのか。

世間や周囲から彼に送られるだろう不名誉な中傷も、なのはが知らないだけで多くあったに違いない。だというのに、彼女を選び、今も変わらず一緒にいてくれるということが、なのはには心底嬉しかった。

言葉に言い表せない気持ちたちが胸の中を温める。なのはは、その気持ちたちが促すように眠る彼の髪に手を伸ばした。

日本人らしい黒髪が指に絡まる。短いそれはすぐに指から離れてしまうが、それでもなのは何度と同じ動作を繰り返した。なんとなく、幸せだなとなのはは思った。

最後に、撫でるように、額に触れて、なのははこの部屋に來た目的を果たすことにした。まだ時間に余裕はあるが、朝食がこのままでは冷めてしまう。気持ちよさそうに寝ているのを邪魔するのは心苦しいが、しかしこれも仕方がないことだった。

そう意を決すると、彼の身体を布団の上から揺らし、少しでも声量を増して声をかける。

「ね、朝だよ。朝食用意したから、起きて」

しかし、何も反応は返ってこなかった。

どうやらかなり熟睡しているらしい。

それだけでなく、少し低血圧気味な彼のこと。そのうえ熟睡しているとあっては、少しホネかもしれない、となのはは思う。

それならば、となのはは揺さぶりの回数を増やし、更に強く声をかけていく。

「ねえ、もう朝だよ。ほら、起き——ツキゃあ！」

ぐっと伸ばしていた手を引かれ、なのははベッドに倒れこむ。

手を引くと同時に寝返りを打ったのか、なのはの身体が彼の上にかぶさることはなかった。だが、寝返りを打ったことによって空いたスペースに、ごろんと寝転がることになってしまう。

突然のことに少し驚くが、目の前に未だに瞼を閉じている彼の姿を認めたことで、なんだかなのはは可笑しくなってしまった。

思わず小さく噴出し、袖を握られた手にそっと手を重ねた。

伝わってくる、温かな温度。そして、同じ布団に包まれて香る彼

の匂い。すぐ近くにいてくれる、一緒にいるのだと身体全体で感じられて、安らぎから笑みが浮かんでくる。

重ねた手に少しだけ力を込める。それでも、乱れる様子のない、彼の寝息。

――ああ、幸せだなあ。

ふと、そんなことを実感する。

けれど、いつまでもこうしているわけにもいかない。

名残惜しいが、現在進行形で朝食の味は失われていつているのだ。料理人の端くれとして、それはやはりただけなかった。

だから、なのははそつとその手を彼のわき腹に伸ばす。

そして、その手をするりとパジャマの内側に潜らせて、直接肌に触れた。

反射的に、ぴくりと揺れる身体。それを愛おしげに見てから、なのははそつと、囁いた。

「起・き・て？」

ぎゅっ。

絶叫と共に、二人の朝が始まった。

最初 出会い、そして未来（後書き）

言い訳。どうやら昔の自分は長編のつもりで序章部分を書いていたが、放置したらしい。

最近発見して、強引にこんな形にしてみました。

これから二人の過去話とかで、色々明らかに出来たら……いいなあ。

しかし、私がリリなのSS書くとヒロインがほぼ確実になのはなってるな……。

PS

Arcadiaにも作者名が異なる同じ作品があります。
が、それは私です。あしからず。

第一話 無印時代（前書き）

この作品は連載というよりは、短編連作に近い形になると思います。基本的には最初に投稿した話の過去、という形で進行します。

第一話 無印時代

その日、彼が公園で泣いている少女を見つけたのは全くの偶然だった。

何故ならば、その公園がある道は彼にとって普段通ることのない道だったからである。通学路からも少々外れ、必然帰り道として利用することもない。そこは、彼にとって存在すら知らない公園だったのだ。

だが、その日の彼は常にはないある事情を抱えていた。そのことが、彼にその道へ踏み入ることをさせたのである。

その事情とは、彼の鞆に入った数枚のプリントにあった。より正確に言うならば、そのプリントをある人物に届けることが、その日に限り彼が抱えることとなった事情だったのだ。

つまるところ、彼のクラスメイトが休んだので、連絡物を渡す役目を担任からおおせつかったのだ。

そしてそのクラスメイトの家は、彼の家に近いが、普段は通らない道の先にあった。それだけのことだったのである。

しかし、その偶然が彼に予期せぬ出会いをもたらすことになる。

見慣れぬ道に入り、暫く歩いた先。そこにあった小さな公園。ふと見れば、そこに人影はない。あまり利用者がいないのだろうか。

そんなことを考えながらその脇を通り過ぎようとした。

しかし、その足が止まる。それは、彼の耳が幼い子供の泣き声を拾ったからだった。

彼は、決して飛び抜けていい人というわけではなかった。だが、自分の近くに苦しんでいる人がいるのに、それを気付いていながら無視できるほど人でなしでもなかったのである。

だから、彼は公園に寄り道をすることにした。ぐっとこらえるような小さな呻き。公園の脇道を通らなければ、絶対に気付けなかったと確信できる、そんな小さくか細い声だった。

そんな声を聞いて、何食わぬ顔などできるはずがない。彼はそんな思いと共に公園に入り、そしてブランコに座って俯く少女に出会ったのである。

下を向き、表情は見えない。だが、砂地に作られる染みが、彼女が泣いていることを雄弁に物語っていた。

泣いている少女を前に、彼は少々困惑する。実のところ、子供を相手にするのが別段得意なわけではなかったのだ。けれど、このまま子供を泣かせたままにもしたくない。

結局のところ、どうにかして泣き止ませないと。そう考えるも、しかしそのためにはまずこちらの存在を認識してもらうこと、つまり話しかけなければならなかった。

しかし、ここに問題がある。

どうやれば警戒を与えないで話しかけられるのか、わからなかったのだ。

普段、子供に接することなどない彼は、いったいどんな言葉かければ子供が喜ぶのかも知らないし、緊張をほぐす方法も知らない。はてさて、どうすればいいんだ？

少女を前に、彼は急いで頭を捻る。が、咄嗟にそんないい方法が浮かぶなら苦労はない。結局何も浮かばないまま、彼はまず声をかけてみるしかないと言意をする。そこから何とか突破口を開くしかない。

となると、まずは自分が不審者ではないことを伝えることが先決だろう。そのあとはまあ、出たところ勝負ということだ。

そう結論を出した彼は、善は急げの精神にのっとり早速口を開いた。

「えーっと、まず俺は怪しい者ではない」

口にしてから思った。

何か間違っている気がする、と。

＊
＊

「もーっ、なんでまたこういう本が増えてるんですか！」

「えっ、うわっ、なのはちゃん!？」

朝、大学に行く準備をしていた彼は、突然聞こえてきた幼い怒声に驚いて振り向いた。

そこにいるのは、日本人にしては色素の薄い茶色の髪をぴよこんと跳ねるように左右で留めた、小さな女の子。比較的近所に住む彼

の妹分、高町なのはだった。

彼にとって非常に親しい女の子であり、また可愛がっている少女である。その愛らしい容姿と優しくしつかりした性格からか、家族のみならずご近所さんにも愛されている。

それは彼にとっても同じで、彼女が見せる笑顔にはいつも心を癒されているのであった。

が、しかし。今はその笑顔は鳴りを潜め、代わりに浮かんでいるのは頬を膨らませた怒り顔だ。

先程の叫びを聞いた彼には、その理由に察しがついていた。恐らく、彼が今本を手に行っているように、彼女も持っているその本。その本こそが、彼女の怒りの原因だろう。

今日の講義に必要な資料や教科書の類を鞆に詰め込んでいた彼の手にあるのは、「教育概論」。対して、眉を可愛らしく歪ませて彼のほうを睨みつける小さな手には、「美人教師 vol. 3」。

わざわざ自室から離れたところに隠してあったソレが、そこにある。

彼の目の前は真っ暗になった。

「お兄さん、正座」

「えっと、いや、それはね？」

「せ・い・ざ・です！」

「……はい」

ぶんすか怒るなのは前に、彼は滑らかな動作で正座を敢行。それはまるで同じ動きを幾度となく繰り返したかのように、無駄のない美しい流れであった。

そして、そこから始まるなのは説教タイム。小さな身体で彼の前に立ち、腰に片手を当ててもう一方の手で指を立てながら頬を膨らます姿は、正直に言ってかなり可愛い。

だがしかし、怒られている内容が内容だけに、彼はそんなことを思う余裕すらない。ただひたすら、羞恥と情けなさに肩を落とすだけであった。

なんといっても、大学生にもなる男が小学三年生にエロ本の所持について怒られているのである。そんな幼い子に自分の隠すべき暗部が知られ、しかもそれを公開された上で責められているのだ。これほど恥ずかしいことがあるだろうか。

ちなみに、なのはが小学三年生にして何故こんなにマセた知識を得ているのかというと、彼女の家族が原因だったりする。

彼女の兄、高町恭也が昨年に友人から押し付けられた（本人談）エロ本を、なのはが偶然にも手にとって見てしまったことが事の始まりである。

幼いながらに賢く、また理解力も高かったなのは、詳細は分からぬものの“その女性の裸ばかりが載った本が兄の元にある”ということをまず理解。次に、そこから連想して“どうやら男性が手に取る本である”ことを理解。更に、自身で調べてみて“それが男性にとって大事なもので、しかし世間的にはあまり良くないものである”ということを理解したのである。

そして彼女が至った結論は“大切なのはわかるけど、あまり良いものじゃないなら、良くない”であった。

結果、なのははその本を手に持ち、家族と談笑する兄の前で「こういうのは良くない」と兄を心配する純粋な気持ちでたどたどしくも論そうとしたのである。

そうしてなのはから論されている時の恭也の表情は、父士郎曰く「いっそ死にたい」だったそうだ。

無論、なのはに理解できたのはそこまで、性というものを詳しく知ったわけではない。恭也に対しては、純粋にこれは良くないものらしいから、と心配の気持ちで言ったに過ぎなかった。

しかし、彼女が恭也以外に兄と呼ぶ彼の家に訪れた時。そこで兄と同じような本を偶然見つけてしまったなのは、何とも言いがたい不快感に襲われた。

心配の気持ちではなく、真っ先に浮かんできたのは、どうしてもという疑問。次いでわけのわからぬ胸の痛みが生まれ、最後に重たいモヤモヤが頭の中を覆い、なのはの身体を奪っていった。

その結果、なのはは彼に癩癩にも似た理不尽な思いをぶつけるこ

とになる。この本を手を持つ者のような人間を表す、世間で呼ばれる三文字の言葉。その知ったばかりの言葉を用い、彼女は上手く言えない気持ちを乗せて、こう言った。

「エッチなのは、あんまり良くないと思います！」と。

これに当時高校三年生の彼は、大きな衝撃を受けた。

まさか自分のエロ本をこんなに小さな女の子に見られ、しかもそれについて責められるなんて。

しかも正座までさせられて、その本を前に話し合うことになるなんて、と。

その時の彼の心境は「いつそ殺して」であった。これ以後、彼と恭也の仲は非常に近づき、良き友となるのだが……それは蛇足であろう。

以降、なのはは何度か彼の家でこの手のものを発見し、そのうち段々と怒りにも似た気持ちが湧いてくることを自覚する。そして、そのたびに彼女は彼に対して今回のような説教を行っているのだった。

そんなわけで、久しぶりに見つかってしまいお説教を受けた彼は、粛々とその言葉を受け入れていく。

なののはも幾らか不満をぶつけて落ち着いたのか、喋るのをやめて、

今度はうーっと唸る。

そして、正座している彼の前にちょこんと座る。と、次の瞬間にはそのお腹に向かって抱きついていた。

おっと、と言いながらも彼は突然のことに体勢を崩すことなくそれを受け止める。そして、彼のお腹に顔を埋めたなのは、そのまま暫くじっとしていて動かなかった。

そんな彼女の頭の手を置いて撫でながら、彼は毎度恒例となったこの行動に、やれやれと苦笑する。

最初に彼にお説教をした時も、なのはは最後に彼に抱きついた。いきなりの行動に驚いた彼がどうしたのかと問うと、なのはは小さくこう答えた。「なんだか嫌な感じがするの」と。

そう答えたなのはが、その実際の体躯以上に小さく見えたからだろうか。彼はその行動については何も言わず、ただその頭を撫でた。

それ以来、同じことがあるたびに、なのははこうして抱きついてくる。そのことに苦笑しつつも、しかし妹分の可愛い行動に思わず頬が緩む彼なのだった。

その後、機嫌を直したなのと共に彼女が手ずから作ってくれた朝食に舌鼓を打つ。そして二人で一緒に彼の家を出て、彼はなのを彼女の通う小学校へと向かう通学バスの停留所まで送っていく。

この一連の流れが二人にとっての日常である。こうなったのがいつからだったか彼は正確に覚えていないが、確か彼女が突然母である桃子に料理を習い始めた頃からではないかと当時を思い返す。

一体なにが切っ掛けであったのかは知らない。しかし、いつしか彼女は料理をするようになり、元から器用であったことも手伝ったのか、わずか数年で一般的な家庭料理は充分に及第点を与えられるほどに成長したのである。

とはいえ、その料理が家族に振舞われることは滅多にないらしい。専らそのご相伴に預かるのは彼一人であり、またなのもそれだけでいいと思っているようだった。

大方親元を離れアパートで一人暮らしをしている自分を心配しての行動だったのだろう、と思う。そう思えば嬉しくもなるし愛おしさも湧く。

小学生の彼女に負担をかけている現状が好ましくないのは事実だが、実際のところなのは料理は美味しいし、それを楽しみにしている部分もあることを自覚している彼は、そのことについて強く言えなかった。

だから、ただひたすら彼女に感謝をし続ける。彼は隣で自分と楽しそうに会話を続ける少女を見て、心の中でそっとお礼の言葉をかけるのだった。

さて、そうして辿り着いた停留所。そこで待つこと数分、彼女が通う聖祥大付属小学校の通学バスがやって来た。指定位置に上手く停車したバスの乗降口が開く。それを確認して、彼はなのはを促した。

「ほら、いってらっしゃい」

「うん、いってきます!」

笑顔で応えたなのは、タラップを軽快に上がって行き、そしてすぐに扉が閉まる。

中で友人と合流したのだろう、彼も知る二人――アリサ・バニングスと月村すずかと並んだなのはは窓越しに彼に手を振る。

横の二人もそれに倣ってか手を振ってきてくれたので、彼も笑って手を振ってそれに応えた。

それは発車したバスが角を曲がって見えなくなるまで続けられ、それを見送った彼は振っていた手を下ろして踵を返す。目指すは海鳴駅。彼が通う大学に向かうためである。

今日は一限から講義があるため少々面倒に思うが、理由もなく休むというわけにもいかないだろう。

「よし、行くか」

気だるげな気分には活を入れるように、声に出す。

そして彼はゆっくりと歩き始めるのだった。

＊

それ以降も、特に何の変哲もない日々が過ぎた。

なのはが突然ペットを飼い始め、見慣れないペンダントをつけるようになったことが、変化といえは変化だろうか。

もちろんそのことに彼は気付き、急にどうしたのかと軽い気持ちで尋ねてみた。実際のところ世間話の延長程度のつもりだったし、ちょっとした気持ちの変化、ぐらゐの答えが返ってくるだろうと思つてのことだ。

しかし、そんな彼の予想は外れる。その問いかけに、なのはは珍しくからかうような笑みを見せて回答をはぐらかしたのだ。

「えへへー、ひみつ」

そう言つて得意げに胸元の赤い宝玉を弄る彼女に、彼は暫し呆氣に取られる。しかし、今度は温かな眼差しを彼女に向けた。

昔は何でもかんでも話してきて、どんなことでも打ち明けてくれていたのに。もうこんな風に自分の秘密なんてものを持つようになったのか。

と、まるでなのはの父親か何かかのようにしみじみと思ったのだ。その胸によぎるのは、若干の寂しさと悪戯げに笑う妹分を愛おしく思う気持ちだった。

「ああ、こうしてこの子はいつか自分から離れていくんだなあ」と、そんなことまで考え、しまいには、「まあ、この子の恋人になるにはまず自分の眼鏡に適わなければ認めないけど」などと考える始末。

いささか思考が飛躍する、シスコン気味な彼だった。

とはいえ、そんな彼女の成長を喜んでいるのも事実。よって、彼はそんな彼女の頭をぐりぐり撫でて、「生意気な！」と笑う。

それを受ける彼女も「やめてよー」と言いつつもその顔は笑っており、本気で嫌がっていないのが一目でわかる。

そんな二人のやり取りを、部屋の隅にいるフェレットが一匹、どこか物寂しそうに見つめているのだった。

そんな風に少々の変化はあっても、大きな問題もなく過ごしていた日々。しかし、突然その穏やかな日常に大きな事件が訪れる。

いつも通り、なのはと共に朝食をとり、しかしその日は彼女の父親が監督を務める少年サッカーチームの試合を見に行くといつて、なのはは帰っていった。

それを見送った彼は、さて自分はどうかと考える。休日はなのはに用事がある時以外は二人で出かけたり高町家に遊びに行ったりして過ごしていた。

しかし、今日は父士郎の監督する少年サッカーの用事。となると、家には誰もいない可能性が高い、と彼は判断する。

何故なら、恭也は休日は恋人と過ごすことが多く、また美由希はわりと図書館などに出かける頻度が高いことを知っていたからである。母である桃子は店があるので言わずもがなだ。

そうになると、いくら親しいとはいえ、他人である自分が勝手に家にあがるわけにもいくまい。

さて、そうになると何をするか。彼は腕を組んで悩むが、いい案は浮かばない。しかし、その時ふと読みかけで放置してあった小説があったことを思い出した。なら、それを読んでしまうことにしよう。そう今日の行動を決めると、彼は早速その本を取り、ベッドに寝転がると読書を始めたのだった。

そうして過ごすこと暫し。昼食は面倒だったのでカップラーメンを作り、それを食べた。今日の目的であった小説も午前中に読み終えていた彼は、あとはただだと寝て過ごそうか、とそんなことを考えていた。

が、その時。

突然大きな揺れが彼の身を襲い、その思考は強制的に中断させら

れることとなったのだ。

「じ、地震か？」

その揺れに、たまらず彼は室内にあった勉強机の下に隠れた。小さな時から繰り返し受けてきた避難訓練の成果である。地震の時に真っ先に思いつく行動がそれであった。

そして揺れはその後収まり、彼は急いで玄関に向かってドアを開け放ち、また元栓やブレーカーなどの処理をして回った。

そこでようやく一息ついた彼は、開け放った玄関から外の様子を窺おうとする。彼の部屋はアパートの二階にあり、外に出れば周囲を見渡せるはずだと思ったのだ。

警戒しつつ外に出る。そして、目に飛び込んできた光景に息を呑んだ。

「な、なんだこれ……」

そこには、信じがたい景色が広がっていた。

市街地のほうに聳える常識はずれな大きさの大樹。そして、その樹から伸びるいくつもの根が町を切り裂くかのように地面を蹂躪する姿。

硬いはずのコンクリートが何の意味も為していない。恐らく、あの場に人がいれば、それこそ何の抵抗も出来ずにその生を終えることになるだろう。

そう考えて、ぞっとする。

そして、それがもし自分の知り合いであつたならと考えて背筋が凍った。

「ッ、そうだ！　なのはちゃんや、皆は！」

はつとそのことについて思い至つた彼は、果たしてこの状況で皆が無事でいるかどうか、それが分からぬことに焦燥を覚えた。

この状況でアパートを出ていいものか数瞬迷つたが、このまま家にいても安全だとは限らないと判断して外に出ることを決意する。そもそも、皆の安全が分からない状況は、彼の心に大きな負担をかけており、それに耐え続けられるとは思えなかったのだ。

彼は財布を始めとする貴重品を小さなバッグに入れていくと、開けたままになっているドアから外に出る。

そして二階から地上に降りるべく鉄製の簡素な階段を下りていったところで、遠くからも見えていたあの大きな樹がなくなっていることに気がついた。

一体どういうことなのか。不思議に思いつつ、彼はそのまま地面に降りて町を歩き始めた。

すると、そこにはアスファルトや石垣が碎けるなどの被害は見取れるが、それを為した木の根などの原因がどこにも見つからない。

そのことに、彼はなんとも釈然としない気持ちを味わっていた。あれは一体なんだったのか。本当に現実起こったものだったのか。自分がさっき見た光景に、疑いすら湧いてくる。

しかし、こうして町が破壊されているのは紛れもない事実。その原因がどうであれ、被害が出ていることは間違いない。

だから、彼は再び足を進めて特に親しい人たち——高町の人たちがいるだろう、彼らの自宅に向かうのだった。

知り合いの姿を探して、周囲に目を配りながら歩くこと暫し。

彼は街角に見慣れた少女の後姿を見た。

聖祥大付属小学校の制服、跳ねるように結われた栗色のツインテ

ール、そのすぐ傍に佇む一匹のフェレット。彼が間違えるはずもない、妹分の姿がそこにあった。

「なのはちゃん！」

安堵と、心配と。そんな感情が入り混じった心のまま、彼は少女の名前を呼んで駆け寄った。

呼びかけられた彼女は、びっくりと肩を震わせて俯く。

しかし、彼はなのはの無事な姿を確認したことが嬉しかったためか、その不審な態度に気がつくことはなかった。そのまま彼女の傍に寄ると、この状況で怖い思いをしたらどう彼女を気遣う声音で話しかけた。

「よかった、無事だったのか。街があんなことになってたから、不安でさ。でも、怪我もないみたいで良かった――……なのはちゃん？」

懸念が一つ解消されたことで緊張が解れたのか、些か早口で話す彼は、しかし彼女の反応が何もないことに気がついた。

それどころか俯いて顔も見せないなのはを見て、さすがに彼も不審に思う。何かあったのか、そう思って問いかけようとしたところで、なのはがゆっくりと顔を上げる。

そして、その上げられた顔を見て、彼は驚きに目を見張った。

「なのはちゃん……泣いて……」

彼女の目には溢れんばかりの涙が浮かんでいた。瞳は潤み、その細い眉は悲しげに歪んでいる。

元来明るく、また我慢強い彼女を知る彼は、そのことに驚いた。そして、そんな彼女が涙を浮かべるということは、余程のことがあったということだ。そのことを察した彼は、なのはの肩に優しく手を置く。

「どうしたの、一体なにが――」

そう話を聞こうと尋ねた瞬間。

なのはの小さな身体は、勢いよく彼のお腹にしがみついていた。

縋りつくようにまわされた腕に、強い力が込められている。

これは、本当に洒落にならないことがあったのかもしれない。

そのことに本気で心配になった彼は、しがみつく彼女に優しくもう一度問いかける。

「なのはちゃん、一体……」

しかし、全てを言う前になのはは身体を押し付けたままぶんぶん首を振る。

どうやら、言うつもりはない、ということを示しているようだ。

それを悟り、彼は地面に立つ彼女のペットでもあるフェレット——ユーノを見る。この子が喋れば、あるいはどうしてなのはが泣いているのかも分かるかもしれない、とそんなことを思ったからだ。

だが、動物が人の言葉を話すわけもない。ゆえに、彼は一つ息を吐き出すと、なのはの背中をぽんぽんと叩く。

その刺激に、なのはは泣き顔のまま顔を上げた。

涙と、少しばかりの鼻水と。お世辞にも綺麗な顔とはいえなかったが、しかしそれを汚いなどとは欠片も思わなかった。

彼は彼女が安心できるように、少しだけ笑みを見せて背中をさする。

「……俺は、よくわからないけど。とりあえず、泣きたいなら泣いておこう。ただ、そのあとはいつもの笑顔を見せて欲しいけどね」

その言葉に、なのはの顔が歪む。再び涙腺から溢れる水滴が線を描いてその頬を滑り落ちていく。

「う、ふえ……」

泣き声が僅かにこぼれるが、それを聞かれまいとしてか、彼の身体に顔を強く押し付ける。

何を抱えているのか。何があつたのか。それを、彼は知らない。

知りたいと思うが、けれど力尽くで聞き出そうとは思わなかった。

なのはの力になりたいと彼は思うが、しかし彼女のほうから求めてくれないければ、真に協力など出来るはずもないからだ。一方が協力して欲しくないと思っていれば、そこに協調性が生まれるわけではない。

だから、彼はなのはが話したいと思ってくれるのを待つことにした。そして、その上で自分に出来ることをしようと心に決める。

なにせ、自分はこの子の兄貴分なのだ。なら、この子のために骨を折ることに何の抵抗があるだろう。

とはいっても、所詮自分は何の力もない学生に過ぎない。出来ることなどたかが知れている。

それでも、何かできることはあるはず。そう信じて、この子のことを支えていこう。

（とりあえずは、こうして胸を貸してあげること、かね）

身長差のため、実際には胸ではなくお腹を貸している形になっているが、そこは置いておく。

肩を震わせて縋りつくなのはの背をさすりながら、彼はそんな決意をするのだった。

第一話 無印時代（後書き）

無印、なのはが小学生の頃の二人。

無印時代はあと一話ぐらいで終わらせられたらいいなあ。

第二話 無印時代？（前書き）

前話の続き。

無印時代完です。

第二話 無印時代？

こここのところ、なのはの周囲で何かが起こっている。

自分の部屋、そのベッドで眠るのはの手を握りながら、彼はその脇で思考する。

自らのその予想に確信を深めている彼だったが、しかしそれを本人に問うたことはない。

それは、彼女が彼女自身の決心によって話してくれるまでは聞くべきではない、と感覚的に察していたからだった。

そう思ったのは何故か。そう問われれば、彼はこう答えるだろう。「彼女が話してくれないということは、そういうことなのだ」と。

——高町なのはは、この世界の誰よりも彼に心を許している。

これは彼自身が常日頃から感じていることであり、また彼らをよく知れば知るほど誰もが実感する疑いようなない事実であった。

彼女の彼に対する信頼は、それほどまでに深く、また傍からもわかるほどに明確だった。

それが、かつて彼女が抱えていた事情に由来することに、彼はも

ちろん気がついていた。

そう、刷り込みのようなものだったのだ。心から頼ることが出来る人が誰もいなかったあの時、そこに現れた自分に、彼女は家族以上の何かを見出したのだろう、と。

とはいえ、それも昔の話だ。家族との仲が良好になってから、なのは家族に甘えることを覚えた。そして、それまでの反動もあったか世間一般の子供よりも、よほど甘えん坊になっているように思う。

その、自分に対するものと似通ってはいるが、しかし明らかに違うリラックスした態度に、若干の寂しさを感じたのを覚えている。無論、そんなことは表に出さなかったが。

これで、彼女の兄代わりも終わりか。そう思ったが……何故か、いまだになのはは彼に懐いていた。それも、家族が嫉妬するほどに尚一層、だ。

そのことに、首を傾げることも多い彼であった。

「んにゃ……」

布団の中から聞こえた声に、はっと意識を戻す。

見れば、握っていた手に微かに力が込められていた。

「……………」

その手を、軽く握り返す。

すると、それがわかったのか、どこか表情を緩めて再び安定した寝息が聞こえてくるようになった。

その様子に、少しだけ笑みを浮かべて、彼は思う。

自分もまた、この子に随分と救われている、と。

一人暮らしをしている自分が、寂しさを感じずにいられるのは、偏に彼女のおかげだ。

自身の高校卒業と同時期に、仕事のため引越しを余儀なくされた両親。そんな中、既に合格を決めていた大学から離れてしまうこともあって、彼は一人海鳴に残る選択をした。

それまで家族で過ごしていただけに、一人ということに、最初はやはり寂しくも思った。しかし、その寂しさを埋めてくれたのがなのはだった。

昔と変わらず、自分の傍で楽しそうに笑う彼女がいたおかげで、彼はそんな気持ちがあつと心の中で溶けゆくを感じていた。また、彼女の家族も自分によくしてくれた。そのことが、彼にはとても嬉しかったのだ。

だから、力になりたかった。少しでも、この少女が幸せになれるように。それが、恩返しだ。きっと誰にも話すことはない、彼だけ

が知る、彼なりの恩返しなのだった。

「……けど、なあ」

ぼやくように口をつく。

そう、けど、なのだ。

いくら彼がそう思っている、彼女が何も言ってくれなければ何も出来ない。

先述したように、高町なのは彼に誰よりも心を許している。

ということは、彼に話さないということは、それは“彼に関わって欲しくない”と知っているということに他ならない。そうでないなら、彼女は彼に助けを求めるし、相談もする。それが無いということは、彼が関与すること自体を快く思っていないのだ。

また、彼女はこの年齢にしては聡明だ。自分に出来ることと出来ないこと、そして自分に出来て他人に出来ないことの分別がつく。そこまですれば、彼女が今彼に対してどう思っているかは察しがつく。

つまり、彼女はこう思っている。

“彼に出来ることは何もない、ゆえに関わって欲しくない”と。

あくまで、現在彼女が抱えているだろう件についてだ。それに、明確にそんな拒絶の意思を持っているとは思っていない。

しかし、彼女が自分に話さない理由に思い至った彼が落ち込むのも、仕方がない話だろう。

彼は、その自分の予想を間違っているとは微塵も思っていない。彼女が彼に心を許しているのと同じく、彼もそれに比例して彼女のことを誰よりも理解している自信がある。

だから、間違えるはずもない。その自信があるからこそ、彼は悩んでいた。

「話してくれないと、何も出来ない……」

眠る彼女の髪を撫でる。

今日、なのはは怪我をして家にやって来た。軽いものだったが、しかし怪我は怪我だ。どうしたのか聞いても、答えない。今彼女が置かれている事情に関わっているのだと、すぐにわかった。

なんだか日に日に落ち込みが深くなっていく彼女を抱きすくめ、そして寝かしつけたのが先程のこと。高町家には既に連絡済だ。今日はそのまま泊めてやって欲しいと頼まれた。

その時、彼はつい聞いてしまった。「なのはが何をやっているのか知っていますか」と。

しかし、それに対する答えは「知らない」だった。けれど、彼らはこうも言った。「何をやっているかは知らない。心配もしてる。けれど、間違ったことはやっていないと自信を持って言える。だから、やれるところまでやらせてあげたい」と。

その言葉に、無類の信頼を見せ付けられたようだった。心配ばかりの自分がなんだか小さく思えたのを、彼は少し恥ずかしく思ったほどである。

けれど、その言葉を聞いて彼も覚悟を決めた。

彼の答えは待つこと。そして、彼女が安心できる居場所となることだった。

なのはが、何をしているのか気にならないといえは嘘になる。けれど、自分がそんな風に気を張って彼女のことを見ていれば、きっと彼女も知らず肩に力を入れてしまうことだろう。

心身ともに疲れた様子を見せる彼女に、それは負担にしかならない。帰ってくる場所がそれでは、しっかり休むことも出来まい。

だから、彼はなのはが心身ともに安らげる居場所であろうと思ったのだ。

今のうちに、なのはは何かあると真っ先に彼の住む家に来る。だからこそ、その場所が一番安らげる場所であればいけない。そして、それが出来るのはこの家に住む彼を置いて他にいなかった。

だから、彼はただ彼女を受け入れる。やっぱり、彼女の置かれて

いるだろう何かに対して、何も出来ない自分に忸怩たる思いはある。けれど、そこ以外の場所でなら彼に出来ることはあるのだ。

なら、そこでなのは支えよう。この子が、今までみたいに笑ってくれるように。

彼はその思いを胸に強く抱き、ベッドで眠るなのを見る。

何をやっているのかは、知らない。けれど、それが彼女にとって大事なことなのは判っている。だから、彼は思う。

「――がんばれ」

そっと額を撫でて、囁くように。

握る小さな手に、まだ目の前の少女が九歳であることを再認識する。

無理はして欲しくない。そう呟きつつ、続けた。

「――負けるな」

額を撫でていた手を頭に滑らせ、さらさらと指の隙間からこぼれる髪の感触を感じつつ、手を離れた。

握られていた手を離し、立ち上がる。

さすがに、同じベッドで眠るつもりはない。彼は床に敷いた予備の布団で寝るつもりだった。

本当は無理をしてほしくない。けど、彼女はやめないだろう。それは、既に関わっているからという惰性ではない。きっと、彼女自身にとって大切なことだからだ。

なら、自分はそれを応援するだけだ。自分に出来る形で。

そのためにも、今はしっかり睡眠をとることだ。体調を崩して、ただでさえ大変な彼女を心配させるわけにもいかない。

そういうわけで、彼は布団に入り、全身から力を抜いていく。心配し通しであった疲れもあったのか、眠気が徐々に濃くなっていく。

そんな、朧げになった意識の中。近くで、「うん」と小さく頷く声が聞こえた気がした。

＊

「え、暫く来れない？」

「……うん」

朝。

今日も今日とてなのはお手製の朝食を二人で食べている時、話があると言われて切り出された言葉に、彼は驚きのあまり思わず聞き返していた。

なのは曰く「どうしてもやらなくちゃいけないことがあるから、暫く来れないと思う」。そんなことは今まで一度もなかっただけに、彼は心底驚いた。

「どうして、って言うのは聞かないほうがいい？」

「……うん」

申し訳なさそうに頷く。しかし、その瞳はどうしても譲れない何かを秘めた決意が見えた。

真剣な表情は、決死という言葉が相応しい。恐らく、何か大事なことが始まろうとしているのだ。そのことに、彼女は強い気持ちで臨もうとしている。

それを悟り、彼は溜め息をつく。

そこまで分かっているのに、どうして止めることができるだろう。心配は心配だが、しかしここで引き止めて一生後悔するようなことになっては、そちらのほうが救えない。

それに、彼はなのはを彼なりに支えて応援すると決めたのだ。なら、答えは一つだった。

「わかった。けど、二つ約束してほしい」

「え？」

疑問の声は取り合わず、一本指を立てる。

「一つ、後悔しないように全力を尽くすこと」

きっと、今なのはは彼女にとって大切な何かを経験している。それは彼女の真剣さや、必死さから想像できることだった。

なら、そこに後悔があってはいけない。後になって、絶対に悔い

ることがないように。自分の力を出し切ったと思えるように。全力でぶつかってほしかった。

その結果がどうなったとしても、自分自身に後悔することだけは、あってはいけない。

「うん」

その気持ちを汲んだのか、なのはは力強く頷く。それに彼も頷きを返し、二本目の指を立てる。

こちらは、どちらかといえば彼の我が儘でしかないのだが。

「二つ、必ず笑顔で帰ってくること」

きよとん、となのはは予想もしなかったことを聞かされたような顔をする。

その表情に少しだけ頬を緩め、彼は気恥ずかしく思いつつもその理由を説明した。

「いや、なのはちゃんの心底の笑顔って、ここのところ見てなかったから。いつも、何かに悩んでたでしょ?」

思い当たる節があるのか、なのはははっとして俯いた。

目の前の彼や家族、友達。どれだけの人に、どれだけ心配をさせてしまったのか。

それを思うと、申し訳なくて仕方がない。なのははそう思って、思わず下を向いてしまう。

「だからさ」

そんななのはを前に、しかし彼は努めて普通に言葉を続ける。

「きっと、最高の結果にして、心から笑って欲しい。やっぱり、なのはちゃんは笑顔が一番！ だから……」

小さなテーブルの上をまたぎ、彼の腕がなのはの頭に向かって伸びる。

くしゃり、と俯いたその頭を少しだけ力を込めて、押さえつけるように撫でた。

「がんばれ！」

彼に言えるのは、結局のところそこまでだ。

なのはが何をしているのか。どうしたいのか。どういう状況にいるのか。その全て、何もかも彼は知らない。

だから、結局彼に出来るのは応援だけだ。そして、応援するからには、掛けられる言葉も一つしかなかった。

だから、彼はその言葉を掛けた。それだけだ。けれど、それでいいと彼は思う。

なのはちゃん、がんばれ。

そう彼女に伝えること。それが、今の彼女のために彼が出来る、彼なりの支え方だった。

そして、その言葉を掛けられたなのはは、大きな幸せに満たされていた。

なのはは、彼に何も言わなかった。きっと知りたかっただろうし、優しい人だから出来る限り手伝おうとしてくれたに違いない。それを望んでいたことも、彼女は知っていた。

けれど、なのはは何も言わなかった。なぜなら、彼女が今いる場

所、今していることは、彼には絶対に出来ないこと。そして、その場にいることすら非常に危険なことだったからだ。

——魔法の力。

なのはは、類稀なほどにその才能に恵まれた子供だった。

だからこそ、突然巻き込まれた事態に対処できたし、その後積極的に関わるようになってからも、何とかやってこれている。

しかし、彼にそれはない。そもそも魔法の源たるリンカーコアが彼の中にないのだ。それは既にユーノとレイジングハートの精査によって確認済みである。

それはつまり、戦う力がないということ。それどころか、流れ弾から身を守る術すらないということだ。

その場にいれば、きつとなのはとユーノは彼を守ろうとするだろう。しかし、なのはが相対する少女——フェイトは、その状態で勝てるほど甘い相手ではない。そして、もし万が一にも彼が怪我を負ったとしたら、なのはは自分自身を到底許せないだろう。

だから、何も言えなかった。知りたいという彼の気持ちを無視し、心配してくれる心に気付かない振りをした。そのことに、どうしようもない罪悪感を感じながら。

けれど、彼はそのことを責めなかった。自分がわざと何も言わないことに気がついていただろうに。それでも、責めなかったのだ。

それどころか、こうして常と変わらず優しくしてくれる。笑いかけてくれる。

あの子に拒絶され、友達と仲違いし、何もかもが上手くいかなかった。そんな時も、ずっと変わらずにいてくれた。そのことに、どれだけ安心しただろう。

そうして今。それだけ気を遣ってくれていた彼に、暫く来れないと告げた。

まるで、彼の好意を無碍にするかのような行いだ。これまでの好意を一切無視して、我を通そうとしている。そのことに、胸が痛んだ。

けれど、彼は言ってくれた。後悔しないように、全力を尽くせと。まるで、なのはが抱える罪悪感なんて気にしなくていいとでも言うように。

自分は、笑顔が一番だと。そして、こんなに我が儘ばかりで、何も教えていないのに。

それでも、がんばれ、と言ってくれた。

そのことが、なのはは本当に嬉しかった。嫌われても仕方がない、そんな気持ちすら抱いていた。自分の我が儘を何の説明もなしに、彼に受け入れさせていたのだ。そうなくても、当然だと思っていた。

だというのに、彼は笑って言ってくれた。応援してくれた。いつものように、頭を撫でて。変わらずに。

なのはの心に温かなものが満ちる。嬉しさと、感謝と、そして幸福感。それから、抑え切れない思いが爆発しそうなほどに膨らんでいく。

なのははその気持ちに正直に従い、椅子から降りて、彼の傍に寄り、座ったままの彼に抱きついた。

食事中だからマナー違反だろうけど、知ったことではなかった。それよりも、今の気持ちを少しでも早く彼に伝えたかった。

胸に溢れるこの気持ちを、全力で。

「……ありがとう！——大好き！」

この人を好きになって、よかった。

なのはは、心からの幸福と共に、そう思った。

*

それから十日ほど、宣言どおりになのは彼の部屋を訪ねなかった。

その間の彼の姿は、第三者が見れば口を揃えて「これはひどい」と心から表現するだろうほどに、なんとも酷いものであった。

まず朝、毎朝来ていたなのは姿が見えないことに心配になりながら、起床。そして、朝食は作る気が起きずコンビニで買ったパンを食べて大学に向かう。しかし、講義は上の空。いつもどこか茫洋としていて心此処にあらずを体現していたとは、彼の友人談である。

昼食、夕食も適当にコンビニ。テレビを見ても落ち着かず、自室にもかかわらず所在無さに部屋中をうろろ。そして就寝前になのはにメールを送り、返ってくる返事に頬を緩め、安堵と共に寝る。

しかし、次の日の朝。なのはの姿がないことに再び心配が募り……以下、エンドレス。

一度、彼の様子を見に訪れた恭也は呆れ気味にこう言った。「なのはがいないと、ホントに駄目だなお前は」と。

彼自身そこはかたなく感じていたことを指摘され、激しく落ち込んだのはご愛嬌か。

ともあれ、そんな日々を過ごして十日。

その日、なのは久しぶりに彼の家顔を出した。

一日だけの一時帰宅だったが、その足ですぐに彼の家に向かった辺り、彼女の気持ちをよく表しているといえるだろう。

幼い頃から慕い、いつからか明確に恋する相手となった人。その彼の部屋の前に立ち、彼女は一度呼吸を整える。

毎日顔を合わせていたというのに、十日離れただけで、何故か気恥ずかしい。けれど、嬉しさを隠すことは出来ないようで、その表情は少しだけ上気して赤らんでいた。

深呼吸を一つ。そして、なのは合鍵を使って鍵を開けると、久しぶりとなる彼の部屋を訪ねた。

「ただいまー！ おにい、さ、ん……」

その時、なのはに衝撃走る。

十日ぶりに訪れた彼の部屋は、玄関から見るだけでも相当に様変わりしていた。

洗濯物が積まれ、ゴミ袋（パンパンに詰まっている）がリビングに鎮座し、テーブルの上には本が乱雑に散らばっている。

なのはは無言で靴を脱ぐとリビングに入る。そしてキッチンを覗いてみると、何故かそこは綺麗だった。まるで、なのはが使った直後から何も変化がないみたいだ。

ちらり、とゴミ袋を見る。空になったコンビニ弁当の群れと、目が合った。

「……………」

「あれ、なのはちゃん!？」

と、リビングの奥。間仕切りで仕切られた小さな寝室から、彼が驚きの声を上げながら現れた。

まさか今日なのはが帰ってくるとは知らなかったのだろう。驚いてはいたが、それ以上にその表情は嬉しそうだった。

しかし、それに対して、なのはの表情は俯いて見えない。前髪が目隠して影を作るその様は妙な迫力を感じさせるが、しかし浮かれる彼はそのことに気がつかなかった。

「そっか、今日帰ってくるって知ってたら色々準備したんだけど…
…けど——」

「お兄さん」

嬉しさのまま饒舌に話し始めた彼を、しかしなのはは唐突に遮る。
それに対して、彼は笑顔を絶やさぬまま、悪気もなく応える。

「うん、なに？」

その、この惨状をなんとも思っていないケロリとした反応に、なのはの我慢は限界を迎えた。

「この部屋の状態はどういうことですかー！　すぐに片付けなさい！」

「は、はいっ！」

思いつきり叱りつけられた彼は、反射的に頷いていそいそと片づけを始める。げに恐ろしきは、愛する妹。その妹に言われては、兄に逆らう術があるはずもなかった。

自分の言葉に素直に従い、せっせと掃除を始めた彼の背中を、なのはぷりぷりと怒りながら見やる。

まったく、本当に、しょうがないんだから。自分がいないと、本当にもう。

怒りながらも、なんだか嬉しさが湧き起こってくるなのはだった。自然と頬が緩んでいくが、そのことに気がついたなのは、意識して表情を引き締める。

そうしなければ、すぐにも表情を崩して、甘えてしまいそうになる。けど、まだだと言い聞かせる。まだ、全部終わっていないんだから、と強く。

(……けど、これぐらいはいいよね?)

そう自分に言い訳をして、なのは彼の背中にそっと身体ごと触れた。しかし、それも僅かの間だけ。彼が気がついて振り返る頃には、その身体は既に離れていた。

「なのはちゃん？」

「もー、わたしも一緒に片付けますから。終わったら、ご飯作りますね」

「あ、うん」

なんだか釈然としない顔で、彼は作業に戻っていく。

その様子を見つめ、なのはは隠れてくすりと笑う。

（うん、頑張ろう）

いつもの二人、いつもの関係。

そんな日々を思って、なのははそっと決意の言葉を呟いた。

＊

それから数日後。

勢いよくドアを開けて入ってきたのはは、一直線に彼に走り寄って抱きついた。

背中に手を回し、自分の身体を押し付けるように体重を預けている。突然のことに彼は驚いたが、その様子から、何となく察した。

——ああ、終わったんだな。

そう、理由もなく思った。

あれだけ悩んで、あれだけ疲れ果てるほどのこと。振り返れば、一ヶ月ほどだろうか。その間、休むこともせずに頑張っていた妹分。

何をしていたのかは知らないが、しかしそんなのはの努力や頑張りを彼はよく知っていた。

だから、彼は何も言わずに抱き締め返す。ぎゅっと、力を込めてやれば、なのはは少し身じろぎをして、下から彼を見上げた。

「ん、ちょっと苦しいよ」

「あ、ごめんごめん」

そんな軽いやり取りの後、彼はふっと力を抜いて笑った。

「おかえり、なのはちゃん」

その言葉に、なのはは満面の笑みで応える。

「ただいま!」

それは、彼にとっても久しぶりな、なのはの心からの笑顔だった。

第二話 無印時代？（後書き）

無印時代、完結。

やはり主人公が魔法にひとつ欠片も関わらないので、フェイトとかユーノとか管理局に出番がないという……。

しかし、A・Sでは多少関わらせたいですね。

でないと、StSでミッドにいるのはなんで？ となっちゃいますし^^；

というわけで、次はA・S時代。

あとは出来れば、無印時代の補完話なんかも出来たらいいと思います。

閑話 無印時代（前書き）

なのはとフェイトの海上決戦のお話。
ちよつとだけ、主人公が影響しました。

閑話 無印時代

なのはにとって、彼は家族同然の存在だった。

泣いていた自分に手を差し伸べ、手を引いてくれた人。それでいて強引ではなく、いつも自分の意思を確認してきてくれた人。

「なのはちゃんは、どうしたい？」

そう問われることが、どれほど嬉しかったか。それは、きっとなのはにしか判らない。

独りぼっちで過ごし、自分という個性を埋没させて、ただ“良い子”であろうとした。そんななのはにとって、自分を見てくれると感じさせてくれる彼は、本当に救世主のような存在だった。

そして、家族よりもずっと家族のようだと、なのはは感じた。それからだろうか、彼のことを「お兄さん」と親しみを込めて呼び始めたのは。

そうして二人で過ごしているうちに、彼はなのはの手を引いて、家族と話す機会を作ってくれた。そこで、なのははきちんと自分の本音をぶつけた。素の気持ちをさらけ出すことに、嫌われてしまうかもしれないという恐怖はあったが、隣にいた彼の存在がなのはの

心を強く支えてくれた。だから、なのはは素直に家族と向き合うことが出来たのだ。

その結果として、今の高町家がある。

彼には、なのはのみならず家族全員が感謝しているのだ。離れ離れになりかけていた家族の心を、繋ぎとめてくれた存在として。

——そして、そんな彼を、なのはは家族としてではなく異性として慕うようになる。

何が切っ掛けであったのかは、なのは自身にも分からない。ただ、いつの間にか“そう”だった。

尤も、それがいわゆる“恋”だと知ったのは、その気持ちを抱いてからもっと後のこと。

“家族に向けているものとは違う、けれど大好きな気持ち”を、母親に相談した時だったのだが。

つまるところ、なのはにとって、彼は家族同然の存在であり。また、それと同時に家族とはまた違う大切な気持ちを抱く存在なのだった。

＊
＊

「――く、うつ……」

粉塵とともに生じた濃密な煙、そして瓦礫に埋もれながら、なのははくぐもった声を漏らす。

フェイトから受けた攻撃は実に素早く、また的確であった。元々高速機動が得意ではないのにとって、それを避け続けるのはただでさえ困難なこと。

まして、足を止めたところを狙われては、ひとたまりもなかった。

そのまま衝撃と共に吹き飛ばされ、レイヤー建造物に叩きつけられたなのは、当然のように瓦礫とともに倒れ伏した。

幸い、魔法は非殺傷設定になっているうえ、レイヤー建造物は実体のある偽物のようなもの。足場に出来るほどには硬いが、中身はスカスカで相当に脆い。バリアジャケットに損傷が出来、肌が裂けたものの、ビルに叩きつけられたとは思えないほどの軽傷で済んでいた。

そんな中、なのはは倒れた状態から身体を動かして膝立ちになる。僅かによろめくのは、非殺傷設定ゆえに受けた魔力ダメージによるものだ。

魔力ダメージは、体内の魔力循環に異常を生じさせ、感覚を狂わせる。また、魔力循環の異常は体内で精密に運用されているエネルギーバランスの崩壊を促し、結果として受けた者の体力を大きく削るのだ。

フェイトの攻撃は苛烈だった。なのはは、己の身体が叱咤せねば動かぬほどにダメージを受けていることを自覚して、改めてあの少女の強さを思い知った。

しかし――、

「……いける、よね。レイジングハート」

《No problem. My master》

なのはは、その強さを知ってなお、諦めない。

相棒であり、頼れる仲間。なのはの愛杖・レイジングハートを支えに、立ち上がると、なのはは強い眼差しで視線の先にいるであろうライバルを見据えた。

「なら、いこう。レイジングハート」

《All right》

レイジングハートを構える。

先端にあたる赤い宝玉部分を目標に向け、素早くそのフォームを組み替える。

選択したモードは、シューティングモード。主の意を汲んだデバイスは、その形状を望まれた姿へと変える。

宝玉を囲うように円形をしていた金属部分は鋭利に尖り、それはまるで向かう先にいる存在を貫くための槍のようにも見えた。

「……わたしの気持ちを、フェイトちゃんに伝えたい」

なのはは、ぐっと力強くグリップを握る。

なのは自身で微調整。杖の矛先を、寸分の狂いなく目標に向ける。同時に、少しだけ魔力を開放して、設置。

「もっと話したい。もっと仲良くしたい。何を考えているのか知りたい。友達に、なりたい」

やりたいことが、沢山ある。欲しいものは、もっとある。

あの日、あの人に出会って、自分の心に正直になった時。あの時から、きつとなのはは変わった。

自分の感情に正直に生きるようになった、と周囲は言う。

これがしたい。あれがしたい。これは嫌。でも、やってみる。

どんな気持ちも、なのははしっかり表すようになった。

それは、過去に自分の気持ちを押さえつけていた反動だったのか。最初はそう思っていたが、最近になって違うことになのはは気がついた。

なのはは知ったから、正直になったのだ。彼に出会い、自分の気持ちに素直になることはとても大切なことなのだと思ったから、なのはは声に出すのだ。

「フェイトちゃんと、仲良くなりたい」

だから、声に出した気持ちはなのはの本心だ。

同時に、絶対に叶えてみせるという決意の証でもあった。

感情に素直だからこそ、なのは常に有言実行だ。それは、自分の気持ちを嘘にしたいくないからである。

（だから、そのために――）

そう、嘘にしないために。自分の願いを、思いを、決して嘘なんかにしないために。

「そのために、わたしは戦う！」

《D e v i n e――》

そんななのはの思いが形になるかのように、桜色の魔力が杖の先端に凝縮される。

凝縮されたそれは、最も安定した形をとろうと自動的に球形を作る。それは、そこに込められたエネルギーの強さを物語っていた。

（それに、約束したから）

なのはは、グリップを更に強く握りこむ。

足を開き、体勢を整え、そして、一度目を閉じてすうっと息を吸い込む。

（頑張るって……全力を、尽くすって！）

そして、開かれた瞳には強固な意志が宿っていた。

強く鋭い眼差しが、いまだに周囲を覆う煙越しに目的である少女を見据える。

なのはの気持ちは、単純明快。

あの子と友達になりたいから、今は戦う。決着をつけなければ、互いに自分から折れることは出来ないから。

そして、もう一つ。彼と約束したから。全力を尽くして、頑張ると。そう約束したからこそ、なのはは全力を尽くす。

なのはにとって、彼は家族同然であり、それとは違う気持ちを抱く存在であり、つまるところ、現在進行形の初恋の人だった。

好きな人との約束を、なのはは違えたくなかった。

そんな気持ちを全部ひっくるめて、なのはは戦う。この気持ちを、

声に出した思いを、嘘なんかにはさせないために。

「デイベイン——バスターアアア！」

そんな少女の真摯な気持ちを込めた一撃が放たれ、それと同時になのはは飛び出す。

あの少女がこれぐらいでやられるはずがないと確信するのはは、どこまでも全力を尽くす。

空中に躍り出たなのはは、すぐさま上昇。

デイベインバスターを正面から撃たれ、その発射元に目を向けているライバルを眼下に見据える。

なのはの手には、シューティングモードのままのレイジングハート。なのははそれを振りかぶると、二個の魔力スフィアを作って、そのまま一気に急降下した。

風を切り、上空から接近するのはに少女が気付く。彼女はその長い金髪の軌跡だけを残して、すぐさまその地点から移動。同時に、なのはに向かつていくつもの魔力弾を放った。

既に高速で落下しているなのはに、それを避ける術はない。正面からそれに突っ込んだなのはは、魔力射撃の雨に晒される。

たちまち魔力の衝突によって爆発が起こり、その魔力煙がなのはの姿を覆い隠す。

高速である弾幕に突っ込んでいったのを目撃した少女は、これで終わったかと僅かに気を緩める。

必殺の一撃を囫にした、上空からの捨て身による無音奇襲。なるほど理に適っており、あやうく引かかるところだったのは間違いなかった。

捨て身だけに決まればただではすまなかっただろうが、しかし結果としてフェイトはそれを察知して回避し、逆にカウンターを食らわせてみせた。

捨て身であるからこそ、カウンターを受ければひとたまりもないまして、高速で自分から突っ込んでいったのだ。魔力弾にぶつかった衝撃だけでも相当なはずだった。

そう理解できるからこそその、一瞬の気の緩み。

それが、咄嗟の判断を鈍らせた。

「えっ!？」

魔力煙の中から、何かが飛び出した。

それはもちろんなのはだが、いつの間にか振りかぶられていた杖は両手で前面に突き出される形になっており、またその先端には円錐状のシールドと思しき魔法が見て取れた。

なのはは、弾幕を見て取った途端、すぐさま方針を変更。レイジングハートを突き出し、その先に円錐状のバリアーを形成。そのまま弾幕に上からではなく横から突っ込み、そのバリアーによって爆発の衝撃を全て受け流し、同時に推進エネルギーに化けさせたのだ。

また、横から突っ込んだ際、その先にいるのは当然先程回避したフェイトだ。

スピードに乗ったなのはは、そのまま杖を突き出してフェイトに向かって飛んでいく。

「たああああっ！」

「くっ！」

気を緩めてしまったフェイトは、数瞬その反応が遅れる。

咄嗟に彼女の相棒であるバルディッシュを構えるものの、いかにせん付け焼刃でどうにかなるほど、今のなのはの攻撃は脆弱ではなかった。

「う、ああっ！」

その突撃に、バルディッシュは弾かれ、フェイトの小さな体は吹き飛ばされる。

その身体が、さっきなのはが叩きつけられたビルの真上に来た時。
なのはの言葉が周囲に響く。

「シュートッ！」

その指示に応じ、上空に待機させていた二個のスフィアが急降下。
バルディッシュが手になく、体勢を崩し、ダメージを受けた直後のフェイトに、それを避ける術はない。

そのままスフィアはフェイトの身体を直撃し、今度はフェイトがそのビルに叩きつけられることとなった。

上から勢いよく落ち、フェイトはビルの天井と床を破壊しながらひたすら下に落ちていく。

しかし、フェイトもさるもので、どうにか体勢を整えて最下層まで叩きつけられるのを回避。その場に留まる。

バルディッシュが手元にない。まずは、バルディッシュを回収しない。

そう焦りと共に、フェイトが考えた時。

——上空から、桜色の光がフェイトを照らした。

フェイトは思わず空を見上げる。そして、その目に映ったものに驚き、目を見張る。

そこには、桜色の太陽が輝いていた。

「これが、わたしの、全力全開っ！」

上空で、なのはが杖の先端をフェイトに向ける。

その動作に、フェイトの背筋に寒気が走りぬけた。

あんな巨大な魔力砲を食らっては、魔力ダメージといえども体力ごと全て削り取られてしまう。いや、それどころか余剰ダメージで数日は起き上がれなくなる可能性すらある。

それほどまでに、あの砲撃は規格外だった。フェイトでさえ、いまだ出来ぬ集束砲。その極致といってもいい、周囲の残留魔力を集めて再利用するというその技術。

それは、自分の最大魔力量の数倍を超える威力をその砲撃に持たせることを可能にする脅威の技術だった。

それがわかるからこそ、フェイトは少ない魔力と体力でも回避に全力を傾ける。この場を離れさえすれば、機動で何とか直撃は避けられる。それだけでも、だいぶダメージは違うはずだった。

しかし、そんなフェイトの思惑は適わない。

何故なら、突然フェイトの両手足が拘束魔法によって捕らわれたからだ。

「ば、バインド！？ そんな、いつの間に！？」

なぜ、どうして。この状況での拘束という致命的な事態に、フェイトの思考が乱れる。そして、迫る絶対のピンチに、その表情が強張る。

その女の子に、負けたくない。この勝負に、勝ちたい。

そんな純粋な思いから何とか戒めから逃れようとするも、その効果は一向に現れない。

そして、その間に上空でなのはの準備は完了していた。

「スターライトォ、ブレイカァアアッ！！」

上空でひととき大きく輝いた桜色。

その巨大な奔流が海面に叩きつけられ、周囲のレイヤー建造物を巻き込んで暴威を巻き起こす。

激しい衝撃に海面は荒れ、たゆんだ海流が打ち上げられて水柱が生まれる。上空まで届いたそれは、やがて散り散りになり雨となる。

それは、この勝負の勝者に降り注ぐ、勝利の雨である。

その後、なのはは、海中に沈んでいくフェイトを助けるために海に入る。

そして、フェイトを腕の中に抱き上げ、互いの全力を称えあうと共に笑顔で自らの勝利を告げるのだった。

*
*

余談であるが。

後日、この勝負の詳細を知った彼は、二人の戦いの激しさ、その小さいとはいえ生傷の耐えないやり取り。どう見ても喧嘩どころではないレベルの戦闘に、若干気が遠くなったという。

そして、全力と無茶は違うこと、怪我をしないようにしてあまり心配させないで欲しい、となのはに訥々と語った。

純粹に自分を思っただけの心配であつたため、なのはにもこれは堪えたように。

以後、なのはの信条は「全力全開」から「無理しない程度に全力全開」に軌道修正されることになるのだった。

閑話 無印時代（後書き）

なんか、ところどころで脳内設定が溢れました。
魔力ダメージとのところとか。

フロム脳積んでると、こういう時に困りますね。

ともあれ、今回は海上決戦でのお話。決戦自体はスピーディに終わ
っちゃいましたが、許してください。

あの時の主人公との会話、そもそも主人公との出会いが、ほんの少
し影響してましたよー、ということでした。

まあ、魔法使えないしなのはの事情も知らないんだから、影響とい
ってもこれが限度ってことですね。

第三話 A・S時代(前書き)

ようやくA・Sに突入です。

とはいえ、まだぜんぜん話は進みませんが^^；

第三話 A・S時代

その日、12月2日。

彼は自宅となるアパートの一室で、壁に掛けられた時計を見つめていた。

「……遅いな、なのはちゃん」

時計が表す時間は、既に夜の九時を回っている。

この時間、いつもならば二人は電話やメールのやり取りをしている筈であった。もちろん、なのはからのアプローチによってである。

なのははこうして少しずつ距離を縮めようと苦心しているのだが、それに気付かず妹分可愛さだけでそれに応じている彼に、なのははいつも肩を落としている。

それはそれとして、なのははこのやり取りを自分から途切れさせたことがない。彼が用事によってやむを得ず出れない時はあるものの、全く音沙汰もないというのは通常では考えられないことであった。

そう、通常では、とつくのだ。実際、半年ほど前になのはが彼に

隠れて行動していた時。その時も、たまに連絡が途切れることがあったのだ。

彼は、その時のことを思い出していた。

「また、何かあったのかな」

そう口に出して、まさかと苦笑する。

あの時のことは既に解決しているはずだった。なのは自身からそう聞いているし、その件に深く関わっているであろう、フェイトという少女のことも見知っている。とはいっても、ビデオメールを通しての間接的なものではあったが。

その様子を見る限り、その問題は解決しているとみて間違いないと彼は思っていた。それは、二人が心から笑みを浮かべて交流していたことから想像できる。二人の間に、何か懸案事項があるような態度は見られなかったからだ。

なら、今日のこれは、何か外せない用事でもできたのだろう。彼はそう思うことにした。

小学三年生とはいえ、なのは塾にも通っているし、家の手伝いも積極的にこなす。それなりに忙しくしているようだから、こういうこともあるだろう、と。

そう結論付けると、彼はなのはに簡単なメールだけ送って、テレビをつけた。

最近になって売れ始めた芸人が映り、明るい笑い声が室内に響く。それに耳を傾けながら、不意に心に浮かんた感情を彼は少しだけ意識した。

(……なんか、こう……)

物足りない。

そんな寂寥感にも似た空隙を心を感じながら、彼はその日の夜を過ごしたのだった。

＊

翌日。

あの後、遅れたもののなのはから連絡を受けた彼は、結局普通に床に就いていた。そして、今日も今日とて目を覚ました彼は、何時に来たのか既に朝食の準備をしているのはに声をかけ、いつものように二人で食事をするのだった。

常と変わらず穏やかな朝の光景。しかしそんな中、ふとなのはからあることが提案される。

「引越しの手伝い？」

「うん。というよりは、ご挨拶、なのかな？ お兄さんもフェイトちゃんって知ってるよね？」

「まあ」

なのはに送られてくるビデオメールで見たことがあるだけではあったが、確かに彼は知っていた。

フェイト・テストロッサ。半年ほど前になのはが知り合い、後に友人となったという少女のことである。長い金髪を左右でまとめ下ろしているのが特徴的で、あまり口数が多くない子供だったことを彼は記憶していた。

なのは曰く色々なことがあって友達になった子、らしい。それを語るなのは表情はどこか悲しげであったが、しかし映像で見るフェイトからそういった様子はあまり見受けられなかった。

どちらかといえば、満面のとは言えないが笑顔のほうが多かったし、彼は彼女に内気だが明るい子なのだろうというイメージを持っていた。

それが彼が知るフェイトという少女の全てだ。そして、なのはの話によると、そのフェイトとその家族がこのたび海鳴に引っ越してくることが決まったようなのだった。

「だからね、そのご挨拶にお兄さんも来て欲しいなって。アリサちゃんとすずかちゃんも呼んでるんだ」

「なるほど。けど、いきなり見ず知らずの俺が行ってもいいの？」

「大丈夫だよ。お兄さんのことは、私が話してフェイトちゃんも、みんなも知ってるから」

「そうなのか」

「うん。みんな、そんなに素敵なお兄さんがいるなんて羨ましいって」

えへへ、と照れくさげに笑うのは。

それに対し、見知らぬ人たちの間で自らの価値が勝手に高騰していることを知った彼は戦慄した。これでは会いに行って本人を見たらがっかりされてしまうのでは、という危惧が生まれたのだ。

変なところでハードルを上げられたことに肩を落とし、同時になのはが一体その人たちに何を言ったのが無性に気になる彼なのだった。

とはいえ、話を聞けばその彼らは半年ほど前になのはが随分お世話になった人でもあるという。

それを聞き、彼は会うことを快諾した。そうと聞いては、この子の保護者として挨拶とお礼をしないわけにはいかない。そんな義務感に駆られたのだ。

シスコンと共にいささかファザコンも併発している気のある彼なのだった。

引越しの手伝いのために先に行くと言って出て行ったのはを送り、彼はゆっくりと準備をする。

なのはに指定された時間は午前と午後の境目あたり。まだまだ時間には余裕があった。

その時間を使い、彼はお土産に持っていくものを見繕う。海鳴でも大きなデパートに出向いた彼は、商品棚を前にどのようなものを持っていけばいいのかで悩んでいた。

よくよく考えれば、相手の好みも何も知らなかったことに気がついたのだ。こんなことなら、事前になのはから何か情報をもらっておけばよかったと後悔するも、後の祭りである。

そのため、こうして唸る彼だったが、結局は定番のもので済ませることにした。本当なら相手が一番喜ぶものがあるだろうが、わからない以上は無難なものにしておいたほうがいだろうと判断したのだ。

そうして彼が選んだものは、引越し祝いの定番中の定番である蕎麦。それと、お茶請けにもなるだろうと思つての、和菓子のセツトだった。

それらを包んでもらった彼は、その足でなのはに教えられていたマンションへと向かう。そこがフェイトとその家族が新しく住む場所なのだと言われたが、そこは最近完成したばかりの高級マンションであった。

世間話の中で聞いたことがあり、場所も近かったため、彼は問題なくその近辺まで辿り着く。そして住宅地の中で一際目立つその綺麗なデザインの良い建物を見上げ……鼻で笑った。

「ふっ……アパートだって、悪くないさ」

完全に負け惜しみだった。

そして、なのはの友達はみんなお金持ちであることを思い出す。なのは自身も、家の庭に道場を構えるほどには裕福である。

どうも、お金がないのは自分だけのようだ。そのことを悟った彼は、少しだけ世の中を世知辛く感じるのだった。

「――あれ、アリサちゃん。あの人はちゃんの……」

「ん、あれ、ホントね。おーい！」

どこか煤けた背中を見せていた彼に、二つの幼い声が掛けられる。

その声に反応して振り向けば、そこには彼が今まさに考えていたなのはの友達が近寄ってきていた。

月村すずかと、アリサ・バニングス。ともになのはの親友という立場の少女達だ。それに加え、彼が先程まで考えていたようにお金持ちのお嬢様である。

すずかは海鳴に居を構える資産家の娘であり、アリサは日本で成功したアメリカ人実業家の両親を持つ。

とはいえ、二人ともそんな家柄に生まれたことを鼻に掛けることのない優しい少女であった。なのはを通じて接点のある彼も幾らか親しくしており、気安く話をする程度には関係を持っている。

それを証明するかのように、声を掛けられた彼は表情を和らげ、片手を上げて挨拶を返した。

「こんにちは、二人とも」

「はい、こんにちは」「ええ、こんにちは」

ふんわり包み込むような笑顔を見せるすずかと、髪をかきあげつつ優雅に返事を返すアリサ。

一目で互いのらしさが見て取れるその様子に、彼は内心で笑みをこぼした。

「二人も、フェイトって子の引っ越し祝いに？」

「はい。私達も、なのはちゃんのビデオメールで交流があって、友達になりましたから」

「そういうわけで、私達も誘われてたのよ。あなたは、なのはから

「？」

「まあね。俺も話は聞いてたし、何度か映像を見せてもらってたから」

そういう前提条件があったから誘われたのだろう。そう言外に含ませつつ、彼は手に持った紙袋を掲げてみせる。「これで、友達じゃなくても入れてくれるといいけど」と笑う。

そのおどけた姿に、すずかとアリサも表情を緩ませて笑った。

ちなみにアリサが彼に敬語を使っていないのは、彼自身がタメ口でいいと言ったからである。アリサの場合、なのはやすずかと話している口調が最も自然なものだと感じた彼が、アリサにそう提案したのだ。

その言葉に甘える形で、アリサは敬語をやめていた。家の教育もあって敬語を使うことに不足はないアリサだったが、やはりそうでない時のほうが気分的に楽になるらしい。彼の提案はアリサにとって嬉しい気遣いだったといえる。

すずかの場合は、敬語であってもそうでなくても問題はなかったようで、むしろ年上に敬語を使わないほうが気を遣う、ということと同じ提案をしたもののこちらは遠慮されている。

さて、それはさておき。

このまま立ち止まって話していても仕方がない、と三人は歩き出し、そして件のマンションのエントランスホールに足を踏み入れた。

そしてエレベーターに乗り、あらかじめ聞いていた部屋番号と照らし合わせて降りる階を指定する。動き出したエレベーターの中、三人は話に花を咲かせていた。

「でも、きちんとお土産を持ってくるなんて、さすがですね」

さすがが、談笑の最中にそう彼の気遣いを賞賛する。言葉にはしなかったが、自分たちは持ってきていないのに、というニュアンスを感じた彼は、フォローのように言葉を返した。

「まあ、こう見えて俺も大学生だしね。礼儀知らずではられないよ。君達はまだ小学生なんだから、気にすることないって。それに、なのはちゃんがお世話になったんだ。兄貴分としては、これぐらいしないかね」

そう言って快活に笑う彼だったが、その言葉に対する返答はなく、何故か二人揃って溜め息をつくだけだった。

フォローが上手くなかったかな、と自分の失敗をバツが悪く思う彼だったが、しかしそんな彼の姿にすずかは苦笑を浮かべ、アリサは再び溜め息をついた。

そして、アリサが少しきつめの口調で声を出した。

「……そうね、なのはの兄貴分だものね」

「そう、だからこそ挨拶とお礼を言っておきたいんだ。手土産っていうのも、芸がないけど」

と、彼は普通に返すのだが、それに対してアリサはやはり嘆息するばかりであった。

その様子に疑問符を浮かべる彼にちらりと視線を向け、苦笑を深くしたすずかがアリサに身を寄せて囁きあう。

「……なのはちゃん、報われないね」

「ホントにね。まあ、気付いているほうが無茶なのかもしれないけど」

そこで、二人は彼を見やる。

狭いエレベーターの中とはいえ、身を寄せ合って小声で話されては内容を聞き取るのは難しい。ゆえに、彼は首を傾げることしか出来なかった。

その、やはり何も理解していない兄貴分に、二人は揃って親友の恋路を思う。

「まあ、年齢差もあるもんね」

「あの歳でなのはを意識しろっていうほうが、難しいのかもしれないわね」

大学生と小学三年生では、文字通りの大人と子供である。

互いにいくらか年齢を重ねた後ならば、十の歳の差も大きな問題ではなくなる。だが、今は大問題だ。社会的に彼の立場が危うくなる。それ以前に、彼の恋愛対象に小学三年生が含まれる場合、それはそれで問題だった。普通は、大学生にとって九歳は対象外だろう。

結論として、現段階で彼になのはを恋愛対象として見て接しろというのは、無理難題というものだった。

それこそ恋愛対象として認識されるには、もっと成熟してから……高校生程度にならなければ意識すらしてもらえない可能性が高かった。

つまり約七年。自分たち子供には長すぎる時間だと二人は感じ、なのはの選んだ道の厳しさに思いを馳せる。

「……なのはちゃん、頑張ってね」

「くじけちゃダメよ、なのは」

二人は小声で大切な親友にエールを送る。自分たちは、いつまでも応援し続けるという決意を乗せて。

ただ一人、事情を知らない彼だけが、そんな二人の姿に怪訝な表情を浮かべていた。

目的のマンションの一室に辿り着いた三人は、そこに今日から住むことになった面々に歓迎を受けた。

なのは達の新しい友達であるフェイト、その飼い犬であるアルフ、フェイトの保護者であるリンディ、更にリンディの息子のクロノと、その恋人であるエイミー（すぐ後にそれは誤解だとクロノからの訂正あり）。

彼含めアリサ達は、なのはから先んじて彼女達のことは大まかに

聞いていたが、本当にその通りの人たちであったことに安堵と好感を覚える。

なのははこう言っていたのだ。「みんな、優しくていい人たちだよ」と。どうにも要領を得ない説明ではあったのだが、会ってみて確かに彼女達がいい人であることを三人ともが感じ取っていた。

お茶やお菓子といったものを用意して、歓迎の準備が整えられ、誰もが笑顔で接してくれる。クロノとエイミィは時おり漫才のように掛け合いを見せていたが、それもまた自然な関係であることを感じさせ、飾っている様子もなかった。

総じて、何も隠すことなく、それでいて良く見せようと必要以上に飾らない。ただありのままを見せて接してくる彼女達に、三人は好印象を抱いたのだった。

そして、そんな居を移してきた人達の内の一人。なのはの友達となったフェイトは、いくらか緊張した面持ちで三人を出迎えてくれていた。

当然、これが初対面となる三人は、なのはの横に立って出迎える金髪の少女と目を合わせると、それが合図だったようにフェイトが口を開いた。

「あの、は、はじめまして。フェイト・テストロッサです。えっと、アリサとすずか、だよね？」

ビデオメールで交流があったことから、フェイトは二人のことを

見知っていた。そのため、緊張しつつも初対面ながらそれなりに親しげに話しかける。

それに、アリサとすずかは笑顔で応えた。

「ええ、そうよ。私はアリサ・バニングス。改めてよろしくね、フェイト」

「私は月村すずかだよ。こちらこそよろしくね、フェイトちゃん」

「う、うんっ」

友情を確認する三人。それを一歩下がって見た彼は、その微笑ましい様子に思わず頬を緩ませる。

フェイトの隣にいるのはもこの光景を嬉しそうに見ていた。フェイトとは並々ならぬ道程を経て友達となった彼女だけに、目の前の光景にはやはり思うところがあるようだった。

そうして互いに握手を交わし交流をしていたフェイトだったが、二人の後ろに控えるように立っていた彼の存在を忘れたわけではなかった。

二人との交流に一区切りつけると、次は彼に顔を向ける。それを受けて、彼は気持ち腰を落として目を合わせやすくした。そうして出来るだけ警戒させないように笑顔を浮かべるが、しかしフェイトはどこか腰が引けているようだった。

そんなに自分は怖いのかと内心で落ち込む彼だったが、しかし原因は彼にはなかった。

ある意味特殊な環境で育ったフェイトは、異性との接点に乏しかった。いや、皆無だったと言っているほどであったのだ。

教育の過程で常識的な情報を得、知識としても充分に知っていたフェイトであるが、何事も実地の体験に勝るものはない。その点でフェイトには体験というものがまるつきり足りていなかったのだ。

とはいえ、クロノやユーノ、そしてアースラのクルーにもいる男性陣によって、いくらその不足分は解消されている。しかし、初対面の異性にいきなり強気に出られるほどでもない。

結果として、フェイトは少し尻込みした状態で彼の前に立つことになっているのであった。

「その、はじめまして。あなたが、なのはのお兄さん、ですか？」

たどたどしい言葉ではあったが、嫌われたというわけではなさそうだと彼は安堵する。

そして、その質問に笑顔で答えるのだった。

「そうだよ。まあ、なのはちゃんの本当のお兄さんは別にきちんといるんだけどね」

「えっと……そうなんですか？」

こてん、と首を傾げる反応に、彼もまた「ん？」と首を捻る。

事前に自分のことは話していたのではなかったのか。朝にそう聞いた覚えのあった彼は、なのはのほうを見る。

すると、なのははフェイトに言い聞かせるように語り掛けた。

「そうなんだよ、フェイトちゃん。お兄さんはお兄さんで、お兄ちゃんはお兄ちゃんだから！」

「なのはちゃん、それ余計にわからないよ……」

明らかに要領を得ないなのはの説明に、すずかから鋭いツツコミが入った。

（そういえばなのはちゃん、国語の成績悪かったな……）

彼も彼でそんなことを心の中で考えており、いささかならずとも失礼であった。

「え、え……？」

そして当のフェイトとはいえば、やはり理解できなかったのか更に当惑していた。そんな周囲の様子にアリサは溜め息をついていたが、目の前にいる彼はそんな対応をするわけにもいかなかった。

妹分のフォローも兄貴の役目か。そんな風に自分を納得させて、彼はおろおろと戸惑うフェイトに声を掛ける。

「つまりね、俺はなのはちゃんと血の繋がった兄妹じゃないってこと。でも、本当のお兄さんじゃないけど、それぐらいに仲がいいから“お兄さん”って呼ばれてる……って言えば、わかるかな？」

「あ、はい」

今度はフェイトも理解できたようで、素直に頷く。

かなり短縮した大雑把な説明であったが、要点は抑えてあったので、フェイトにもわかりやすかったのだろう。

だが、なのはにとっては言い足りない部分があるらしく、少し不満げに頬を膨らませていた。が、それも彼にまあまあと宥められればすぐに治る。

彼女も自分の説明がどうにもまずかったことは自覚しているらしかった。なのはの場合、こと彼のこととなると感情が先走る傾向があるというのは、彼となのはの関係を知るもの全員の談である。

自分でも実は、そうなのかも、と考えつつあったのはである。

件の彼に宥められてしまつては、拗ねてばかりもいられない。はあ、と自分の国語力のなさに肩を落とすだけであつた。

そんななのは様子を横目で見て、後で慰めておこうと彼は心に留めておく。

だが、その前に……。

「私は、フェイト・テストロッサです。よろしくお願いします」

そう言つて、ぺこりと頭を下げる。

それに、彼もまた自己紹介をして「こちらこそよろしく」と応じる。

笑顔で応じた彼に、少し緊張が解れたのかフェイトも小さく笑みを浮かべる。

そんな和やかな空気が漂う二人を、なのはが嬉しそうにかつ拗ねたように見ていたことを、彼女の親友二人は苦笑と共に見守つていた。

その後、彼は手土産を持って家主であるリンディの元を訪れた。ちなみに子供組は一塊になってリビングで談笑中である。初めて顔を合わせたとはいえ、既にビデオメールという下地があったことが良かったのだろう。仲睦まじげに過ごしているようだった。

「はじめまして。お引越しおめでとうございます。あ、これ差し上げます。つまらないものですが」

「あら、ご丁寧にも。ありがたくいただきます」

受け取ったリンディは、それをエイミィに預けてきちんと保管するように指示を出す。それを受けたエイミィがこの場を去り、残ったのは彼とそれに向き合う形になって座るリンディとクロノだけという構図となった。

しかし、こうして見ず知らずの大人と改まって接する機会に乏しかった彼は、こういう時にどう口火を切れればいいのかわからない。所詮彼はまだ学生の身であり、経験不足というのは隠しようのない事実なのだった。

「なんだか、初めてお会いした気がしないわ」

「え？」

唐突にその場に表れた言葉に、彼は思わずその声を発したリンデイの顔を見る。

その表情はとても穏やかで柔らかく、泰然としている。その様はいかにも大人の余裕を感じさせ、たかが第一声に戸惑っていた自分との差を彼に強く感じさせた。

しかし、それが劣等感に繋がることはない。逆にこの人には敵わないと諦めにも似た思いと共に、身体に入っていた力がすっと抜けるようであった。

これがカリスマ、あるいは人としての魅力というもののなのかもしれない。彼は幾らか楽になった心地で、そんなことを思った。

リンデイは対する彼の顔から強張りが抜けたのを見て取ると、より笑みを深くして言葉を続けた。

「いえ、なのはさんからあなたのお話をよく聞いたものだから」

「あ、ああ、なるほど、そういうことですか。……その、なのはちゃん、なんて言っていました？」

そう彼が問うと、リンディの顔は苦笑を浮かべ。隣のクロノは溜め息をついた。

両者の芳しくない反応を見た彼は、一体なのは何を言ったのかと冷や汗を浮かべる。陰口を言うような子ではないからその点では信頼しているが、実際に二人のような反応を見てしまうと、不安が顔に覗くのも仕方がないというものであった。

そんな彼の内心を慮ったリンディは、苦笑を浮かべたまま口を開く。

「いえ、悪いことを言っていたわけではないのよ。ただ……なのはさんは、あなたのことが大好きなのね、ということ」

「え？」

「あなたのことを話す時、なのははいつも笑顔でしかもあなたのことをべた褒めでした。会ったこともない僕達にも、あなたの人柄がよくわかるほどに。……のろけ話を何分間も聞かされるのは、少々堪えました」

クロノの最後の言葉は溜め息交じりでどうにも明瞭ではなかったが、しかし彼がいかに疲れた様子であったことから迷惑をかけてしまったようだと思われた。

クロノがなのはのことを呼び捨てで呼んでいたことは一先ず置いておくことにした彼は、そうまで言われるほどに自分のことをなのはが話して回っていたらしいことを、気恥ずかしく思う。

とはいえ、それが不快というわけではない。むしろ、恥ずかしさと共に慕われていることへの嬉しさを感じていた。

が、それで羞恥が誤魔化されるといってもないらしく。彼の顔はいささか熱を帯びて赤くなっていた。

「ど、どうもすみません……ご迷惑を……」

「いえいえ、そんな。私は楽しかったですわ。それに、謝らないといけないのはこちらです」

一転、リンディの顔は真剣なものになる。

そして、すっと頭を下げた。

「なのはさんのような小さなお子さんを、何日もこちらに帰さなかったこと。そのことを、謝罪します」

クロノも同じく頭を下げる。

本当にそのことを申し訳なく思っていることがわかる真摯さであったが、そのようにされて彼は困惑するしかなかった。

「いえ、そんな！ 俺はなのはちゃんの家族というわけでもないで

すし、そんなことをされなくても……」

「もちろん、なのはさんのご家族には後できちんとお話に伺います。けれど、なのはさんにとってはあなたも家族のような方だと伺っていたものですから」

そう言われては、彼としても納得するしかなかった。彼自身なのはのことを家族のように思っているし、それを否定することは出来なかったからだ。

そして、こうして本当の家族ではない自分にも頭を下げる姿に、彼らが心からこちらのことを考えてくれていることを察する。そのことを思い、彼はその気持ちを無碍にしてしまうことは逆に失礼に当たると考えを改める。

そして、彼もまた姿勢を正して応えた。

「では、その謝罪を受け取ります。そのうえで、言います。本当に、ありがとうございます」

今度は彼がお礼と共に頭を下げた。

まさか礼を言われるとは予想もしていなかったのだろう。リンデイとクロノは揃って「え？」と疑問の声を上げた。

「なのはちゃんにとって、今回のことはきっと大切なことだったん

だと思えます。俺は何も聞いていないから、想像でしかないですが……」

彼はそこで少し寂しげな顔を見せたが、リンディ達はそのことに気がつかない振りをする。そして、ただ彼の言葉に耳を傾けた。

「でも、そこに俺がいてもどうしようもなかった、っていうのは判ってるんです。だから、そこにあなた達がいてくれてよかった。なのはちゃん一人じゃなく、きちんと頼れる人達が傍にいると思うと、安心できましたから」

そこで一度言葉を切り、彼は改めて向き直る。

「だから、ありがとうございます。あの子の兄貴分として、お礼を言わせてもらいます」

そう言ってもう一度頭を下げる。

その姿を見て、リンディとクロノは僅かながら呆氣にとられた。彼らにとって自分たちは、まだ小さな子供を勝手に連れ回した相手ではないはずだった。

それがいくら本人の望みであり、同意の下のものであったとはいえ、感情がそう簡単に納得できるはずもない。

事実、民間協力者あるいは管理局員として幼いながら勤めた子供の親は、管理局に対して否定的な見方をする人が多いという話もある。まだまだ可愛い盛りの我が子を、横からかどわかったようなものだから、その気持ちは一人の親としてリンディにもわかるものだった。

だからこそ、こうして逆にお礼を言う姿は稀有であった。

そして、その姿にリンディは尊敬の念すら抱いたのである。何故なら、彼は自分の感情は二の次にして、まず第一に“なのはの気持ち”に重きを置いているからだ。

それも、ただなのはが望んだから応援したわけではない。それが、なのはにとって大切なことなのだと察したから全力で支援したというのだ。

それは簡単に言うが難しいことだ。望んだこと全てを、応援するわけではない。それがきちんとその子のためになるかを考え、その上でそれがその子にとって大切なことだからこそ、応援すること。

それは、どこまでもその子のことを理解し、それでいて深く愛していないければ到底できない芸当である。

それだけで、彼がどれだけなのの事を大切に思い、そしてどれだけよく見ているのかをリンディは理解させられた。

彼となのはの間には、きっとそれほどまでに深い繋がりがあるのだと、今まさにリンディは実感したのだ。

（なのはさんのお話の通り……いえ、それ以上ね。なのはさんがこの方のことをよくわかってるように、この方もなのはさんのことを誰よりも理解しているんだわ）

その相互理解が前提にあるからこそ、何も事情を知らなくても彼はなのはをリンディたちに預けられたのだ。その信頼の深さに、それを培い維持している強さに、リンディは尊敬の念を抱いたのである。

だから、リンディは彼のお礼を受け入れた。もちろん、リンディ自身もお礼を言いながらだ。何といっても、助けられたのは自分達なのだ。だというのに、受け取るばかりというのは到底納得できるものではない。

が、事情を知らない彼は、リンディ達がなのはに助けられたといっても理解できないだろう。事実、お礼を返された彼は首を捻っている。

その彼の姿に、リンディはくすりと小さな笑みをこぼした。

「……なのはさんは、幸せね。あなたのようなお兄さんがいるのだから」

その言葉に、彼は一瞬きょとんと目を見張り。次いで、照れくさそうに頭を掻いた。

「そう思ってくれていると、嬉しいですね」

それから少々話を続けたものの、それもすぐにお開きとなった。

そして子供達がいるところに戻ると、真っ先になのはが彼に気付
き、その腰に抱きついた。

それに驚き注意しつつも、引き剥がすまではせずに受け入れている
彼。それに気をよくして、なのはは嬉しそうにそのまま身体ごと
彼を引っ張り、子供達の輪に彼を連れて行く。

それに苦笑しつつ、従って連れられていく。そんな二人を笑って
迎える子供達。

全員に笑顔が溢れるその光景を、リンディは目を細めて見やる。

きっと、私達がいる意味はこの瞬間のためにあるのだ。その確信を強くし、リンディは内心で決意する。

今回の事件も、きっと解決する。この光景を守るためにも。

そして願わくば、その後に待つ光景が今日に映るものと同じものでありますように。

明るい陽だまりの中で笑い合う姿を見て、彼女はそっと願うのだった。

第三話 A・S時代（後書き）

ちなみに、リンディさんが彼に感じたことは、そのまま高町家にも当てはまります。

それだけの理解と信頼あってこそ、放任主義、みたいな。

それぞれとして、A・S始まったけど、まだ最初もいいところです
W
守護騎士なんて一文字も出てきていないとか

さすがにA・Sは二話では終わらないかも。

とはいえ、主人公まったく本編に絡めないのも、そのぶん短くなることは間違いないでしょうけどね。

それでは、また次話にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8571t/>

なのはと普通の男

2011年6月30日22時48分発行